明治二十九年十月二十日發行

女鑑

第百拾九號

東京國光社

女鑑第百十九號目録

左近の局



女子と婚姻（二）

結婚の精神趣旨、結婚の大事なる、あら〱前號のはじめに述べたる如し。實に一身の幸不幸のあづかる事たるは、いふまでもあらず、延いては一家の喜憂ともなるべく、なほ聚りては、一國の喜憂にさへも立ち到るべきものなれば、謹み謹み行はざるべからざる事も、前に述べたるが如し。

此の頃、世におもしろき一種の説をいひ立てゝ、いとめづらしき結婚の風俗を養成せんとする人あり。そは、やがて、男女の愛情を本としたる説なり。則ち、結婚は男女の愛情によりて成立するものにて、愛情の引かむ限りに續くべきものなり。相互の愛情の行く所に從はざるべからず、相互の愛情のよる所に結はざるべからずといひて、相互の愛情の自由にうちまかせて、それならぬものゝ關係するをよからずと爲すものなり。

これ、愛情を潔白なるものと視、愛情を純粋なるものと視、而して、これを痛く尊ぶより起り来れる説にて、愛情を純粋なるものとほめ、愛情を潔白なるものとあがめ、これを尊ぶことは、誠にゆかしく面白く、いと尊ぶべき言なりかし。然れども、これを以て、直に、結婚を、男女の愛情の行く所にまかせむといふは、うけがひ能はざるなり。うけがひ能はざるのみならず、極めて危険なる事をいはむとするものなり。いかにといへば、愛情はもと純粋なるものなり、潔白なるものなり、されど、愛情はなほ水の如し、水はもと清くうるはしけれど、色に染み易く塵に濁りやすきが如く、男女の愛情も、常に純粋潔白なりとはいふ能はず、男女の愛情、とかく私欲に汚さるゝ事多く、外部の塵色に染まること少からず。されば、吾人が理想に考ふる如き愛情を以て、ひたすらに世間の愛情を視る能はず。やがて、純粋潔白なる愛情を以て、盡くは世俗の愛情を視る能はざるなり。世間の愛情は、往々私欲にあやまたれたるものなり、塵欲に惑はされたるものなることを知らざるべからず。

愛情は、斯の如く危険なるものにして、世間の男女の愛情は、また斯るものなり。故に、單にかゝる愛情にうちまかするを、危険とればゆるなり。かゝる愛情のゆくに從ひ、馳するまゝまかせて、さばかり大切なる婚儀を結ぶことを、極めて危険なりと思ふなり。故に、吾人は、さる結婚の法を說くものに同意する能はざるなり。

吾人は、また、かるが故ゝ、元來彼の西洋に流行せる自由結婚の風俗をよろこばざるものなり。否、これを必ず退けむと欲するものなり。且つ、女子の結婚すべき年齢に生ひ立つや、なほ世の中ゝ立ちては、極めて幼稚なるものなり。此のあやしき世の中の事狀には、極めて無識の赤子なり。大概は、温き父母の懐に、僅に温き世の光りのみをればなたるゝ過ぎず。冷やかなる世の風物は、なほ知らざるものなり。やがて、彌生の木ずゑの花なり、たゞのどかなる春の温き光りを知りて、うるはしくほころび初めしのみ。つらき炎熱風露は更に知らざるものなり」げに世の中は、にて草、ゐこ草の茂り亂れたる荒野なり。あら岩あだ波の漲り狂

ふわたつみなり。さるに、なほかばかりに世を知らぬ女子が、一人りゆきて、わがなからむまでの住家を求めむ事は、いかでか安全なる道ならむ。舵なく磁石なくして荒野荒海をさして出るよりも、なほ遙に危くおぼつかなからむ業なり。やさしき父母たる者、なほ手を取り導きて、此のおぼつかなき世の中にわが子の住みつきて老を待つべきわたりを尋ね得さすべきことにこそあれ。やさしき女子たる者、なほ父母の導かせ給ふ手を取り守りて、此のたよりなき世の中に、しづかに住みつきて、女子たり妻たり母たり臣民たる務めを、つとめ果すべきわたりを求むべきことにこそあれ。換言すれば、結婚は、強ちに父母の壓制すべきものに非ず、されど、父母は、かが子を導きて、よき縁を得さすべきなり。また、結婚は、猥りに其の女子の意思にまかすべきに非ず、女子は、父母の正しき案内を守りて、正しき縁を求むべきものなり。これ吾人が結婚に就きて、最穩當なる最正しき方法ならむと考ふものなり。なほいはむと思ふことあれど、そは他日に。

論説



家庭の敎育に就て一言す（承前）

宮地嚴夫

斯くて又、其食事の時間を以て、父母兄姉の、其子女弟妹に敎授する材料は、如何にして之を得べきかと云はんに、其は日々人に交はる應事接物の間に於て、能く意を用ひて居る時は、利益あることの、目に觸れ耳に入ること少からず。中にも、人々の話の中には、特に敎授の好材料多きものなれば、氣を留めて能く之を聞き、また敎育に關する雜誌の中、若くは毎日發行する新聞の中等にも、數へも盡されぬ程に、其材料に供すべき事の有るものなれば、常に心を用ゐて之を讀む時は、所謂無盡藏にして決めて盡ることと有ことと無し。然れば材料を求むるも、容易なるのみならず、斯る家庭の敎育を用ふることゝすれば我得たる好材料は、之を人々にて語り、又人々よりも聞くことゝして、其材料を交換すれば互ひに益することも最も多かるべし之を材料を求むる方法とす。

斯の如くにして、彼歐洲人の定むる所に因れば、一日二十四時間を三分し、其一分八時間となるを、先づ睡眠に宛る時間とし、又八時間を飮食又は散歩運動等の衛生に宛る時間とし、殘る八時間を以て、營業又は勤務修學等の時間とすれば、平生に在る人身に適當の時間割なりと云ふ、然るに今論ずる所の家庭の敎育法を用ひて、飮食時間を以て、家庭の敎育時間に利用し、食堂を以て其敎場に宛る時は、其飮食衛生の爲に消費する時間を轉じて、一日の内知らず識らずの間に、少くとも三四時間を、更に有益の時間となる事なれば、之を一ヶ年の上に積りては、其注意を爲さず、此敎育法を用ひざる者に比して、凡半年間の有益時間を增すものなり。語を換へて之を云はゞ、敎育上に於て、一年間に一年半間の敎育をなすものとなるなり。其幼年者の、學齡年間に在りて、積りて得る所の利益、實に如何ばかりぞや。故に余は之を以て家庭敎育の最良法とはするなり。乞ふ世の家庭敎育を事とする人の父母兄姉たるもの、能く此説を翫味し、若し之を可とせらるゝあらば、直ちに實地に試みられんことを、少か意見を述べて、同感の諸君に質す。

臺灣の女子

大谷聽濤

日淸戰役の結果として、臺灣は我が日本國の領土となれり。やがて本國の人も、彼の地に渡りて、彼の地の人と相携へて日を送ることあらん。されど彼の地の女子は如何なる生活を爲し、如何なる性情を有し、如何なる風俗習慣の裡にあるかを、研究して惡しきことは之を我が善きに同化せしめ、若し善きところあらば、我れ是れに倣ふは、必要の事たるべし。予曾て、筆を載せて軍に臺灣に從へり。兵馬倥偬の際なりしかど、固より女子の事は深く研究する由もなかりき。されど皮相の見たるを免れざるべしと雖も、聊か其の見聞せし所を記して、臺灣の女子のことを研究する一班に資せんとす。

臺灣の女子は無敎育なり、中等以下のものは、一丁字をも知らざる文盲者のみなりと云ふも可なるべく、中等以上の生活を爲すものと雖も、山●とか、川●とか、大●の字とかを讀み得る外、殆んど、文字を知れるものなし。是れ女子を賤視して、女子は家内を守れば、足れりとする習慣あるに基くべく、又郵便電信等の法具はらざれど、遠隔の地への音信等は、殆んど皆無なる故に、文字を知る必要も渺きに由るべし。されど男子の學校としては、寺子屋の如きものはあれど、女子敎育の道は、更になし。或富家の女子が、本國より余が許に來りし女子の書簡を見て、日本の女子は文字を知れりや

と、痛く喫驚せしにても、臺灣一般の女子の無學なるを推すを足るべし。されども、かゝる無學ながら頗る愛國心に富めり。三角湧附近の人民の蜂起して、我が糧食輸送隊を鏖にし、偵察騎兵隊が、三騎を剩す外、打なされたる時の如き、敵の糧食は悉く女子の手に依りて製せられ、又女子の手に依りて、運ばれたり。中には、鎗を挈げて、我が兵を追尾し來りたる女子もありき。南部の戰爭に於ても、纎手に銃を握りて討死し居たる女子ありたり。我より之を見れば、女の身もて叛徒を援くる、ゆるすまじきもの丶如くなれど、彼等より之を見れば、彼等が國家の危急存亡に際し、身を以て、國に殉ずるものにして、佛蘭西の都巴里が英吉利軍に圍まれたりし時、紅顔の身を以て、義兵を擧げたるジャンデアークの心と少しも擇ぶなきにあらずや。陳某と云へる女子は、余に向ひて日本は何故に臺灣に向ひて師を興せしか、砂金、砂糖、米、石炭等産物の饒かなるに垂涎して之を取らんと欲するか、さりとは虎狼の心に非ずやとて、口角泡を飛ばして詰問し、余が、臺灣の我領に歸せし由來より日本國の天皇陛下が一視同仁に在すことを説き聞かすに及びて、始て色解けたる事もありたりき。

臺灣の女子は節操を重んせず、有夫にして後くらきことをし、娘子にしていまはしき行をするものもあり。其の父母及夫の如きも多くは知て知らざる風を爲せり。社會の

制裁、亦至て緩漫にして、之を以て尋常一樣の事とまではなさゞるも、世間有勝の事となすものゝ如し、愛國心に富めるに引き換へて、女子に最も大切なる節操を貴ぶことを知らざるは、誠に悲むべく、慨すべきなり。されども彼等が來客に對し、最も慇懃に、最も愛想よきことは、彼等の長所にして、客の應對給仕等は、彼等の務とする所なり。

（未完）

女子教育一班（二十七）

三輪田眞佐子

第二　國民としての智識　本來、女子は内事をつとめ、男子は外事を執るを以て各の天職となすべきものなれど、男子とて、内事につき多少の智識なかるべからず。もしこれなきときは、一家に起る風波の源を知るに由なき理に等しく、女子もまた、外事につきて幾分の觀念あるべきなり。わきて内政外交多端なる國の女子は、太古結繩の政行はれし單純なる時代の女子と異なりて、是非とも、國民として應分の智識なかるべからず。德川將軍家茂公の御臺所なりし、内親王和宮には、國家のことを御心にかけさせ、（君のため民のためにはいとふまじ身は武藏野の露と消ゆるも）と詠じ給ひけり。かゝる覺悟は、唯にやんごとなき限の人に止らず、賤の女に至るまで同しかるべきこ

とにこそ。

玆に、女子も國民としての智識を養ふべしと言ふも、敢て男子の如く、社會の表面に立ちて、國事に關係せんためにあらず。獨り、遠くは國家万一の秋に身を處し、近くは良人の業務を妨げず、將た、子孫を教育するにつきて、異日の悔なかるべきため、國民といふ大体の思想を蓄へよとなり。そは、今の世は、個人として生存するのみならず、國民として活動すべき必要あるを以てなり。

いでや、わが國の民人として最も肝要なる智識は、わが特得なる、國体の尊嚴を損せざるやうつとむべき任に堪ふるにあり。然るに、智識なきものは、皇國の如何なるものなるかを知らざれむ、一朝事あらんも、以て宜しきに居ること能はず、あるは人の母たらんも、兒童を敎へて善良なる國民となすこと能はざるべし。こを以て、女子もわが國民の經し二千有餘年の歴史を以て、經典と心得、日本臣民たるに足る智識を養はざるべからず。たゞ年代を記し、故實を學び、あるは戰史を讀むを以て足れりとな思ひぞ。

且つ、一國の盛衰興亡は偶然にあらじ、必ず淫逸遊怠にして定業を勵まざるが、文弱に流れて活氣を失ふか、あるは奢侈の風増長して、挽回し難きに由りて衰亡せざるはな

し。さるに、家庭にありて生活の源となり、教化の基となるべきものは、婦女にぞあるを以て、女子も相當の智識を養ひて、國の利害、民の得失を撰ばでやはあるべき。もし木偶の如く、無爲にして衣食せんが、あはれ邦家の前途久しからざるべし。この頃、戰後のためにや、わが國への輸入品、わが國よりの輸出品にいみじく超過するを算して、志あるものは憂ふれど、かゝる輸入の品を求め　あるは家族の求むるにつきて相謀るものは、殆ど女子なれば、女子にして茲に注意せずば、憂へんも益なきことにこそ。なほ、女子も、一國の財源はいつくにありて如何にして得らるゝかをも知り、農業工業などの忽にすべからざるを思はざるべからず。故に、女子に家政を教ふるまに〳〵、經濟の大意を授けば悟ることも多からん。

また、國民の分としては、是非世界の形勢を知らざるべからず。そも〳〵鎖港の時代は、日本は日本の日本なりけるも、開港以來東洋の日本となりき、今や進みて世界の日本となりぬ、なほ、月日と共に如何になり行くべきかを思はざるべからず。現に、少女、學の屋にありて、地理を學ぶ所以のものは、宇治の里にて乙女の摘む茶は、外つ國の人もその風味を愛し、父上兄君のめし給ふ羅紗の衣は、かの國より到來し。將た、わが國の丈夫が、烏拉の峯に駒とめて、東方萬里の高原を望みしときの感慨は如

何にありけんなどの智識を養ふためならんかし。若し女子に國民といふ觀念なからんか、我か國民は、男女合せて四千萬の人口なれど、女子は恰も、あれどもなきに等しきものとならんを以て、その實男子のみ、すなはち、僅に二千萬人の國民と言はざるを得ず、誠に心細くこそ覺ゆれ。

されど、女子普通の教育は、國民として應分の智識を具へしむるも亦目的の一ならんを以て、苟も教育を受けし女子は、愛子なれどとて、兵役の義務を免れしめんとつとむる勿れ、良人不在なれどとて、納税の義務を等閑になすべからずなど、尊き見識を懐くべし、されど國威長へに輝かんかし。

惜哉今の教育は、かゝる資格を養ふに足る學科のみは悉く備はれど、如何せん形式にのみ馳せて、こを實地に施す才幹を練る能はざれど、さながら學術も、造花などの技術と等しき効を顯すに過ぎずめり。吉田松陰先生鐵窓の下にありけるとき、(こゝろあれやひとのはゝたるいましらよかゝらむことはものゝふのつね)と述懐をど妹君につかはしけりとかや。今の教育を受けしもの、かゝる音づれを開かんには、いかにればすらんか。



史談

左近の局

鹽井ふく子

その友を見てその人を知ると云ひけん。まして振々たる君子がよきたぐひとなす所の婦人、またその婦人が杖とも柱とも肱とも股ともたのむ所の女子、何れも窈窕たる淑女たる事は云はずして明かならん。

ろも〳〵學問德行そなはり、まして、世に聖人ともたゝへられ玉ふ水戸黄門光國公の夫人泰姫と申參らするは、近衛關白信尋公の御娘にて、承應三年御年十七にて光國公に嫁したまひしかど、万治元年閏十二月二十三日、御年二十一歳、未だ霜雪をも知らずして枯れ行き玉ひしはかなき。此夫人、御生質の美しきのみならず、詩歌をさへ好み玉ひて、古今集伊勢物語はそらに覺え、源氏物語枕の草紙などをもよく覺え、三體詩なども暗記したまひ、光國公の御光にてらしあひて、互にさえわりけるいもせの御中らひむつましう、いやさかへ、いやしげらせ玉はん事は、高砂の峯にもをにもひ

いきたりしを、下すも憎き木枯の風。御心も、御ざえも、御年も、さなかりは惜しき君を、いたづらに早う散らしたる、げによきたぐひを失はせ玉ひたる光國公の御心は、さこそさびしうれはしけめ、年久しうなるまでも、御物語のついで此上に及びては、いつもうちしをれさせ玉ひしとぞ。

いでや此姫君が、年頃、日頃、たゞ已が影として、つかひたまひたりし形も、心も、學問も、才も世になきめでたき女子こそあれ。左近の局、やがて、これなり。雨夜の品定めに、女のこれはしもと難つくまじきはかたくもあるかな。あるは已れをのみ、才かしこがりて、人をありとも思はぬ、あるは心くねりたる、ねじけたる、あまりにひき入りたる、あるは輕々しく、またはは梅に粥にたゞ色香をのみめで、霜にほこり、雪をしのぐの操を忘るゝに似たるなど多くて、之はしもと思ふ中にも難つくまじきは大方五十四帖もの中に、たゞ僅かなるを。今そのをしへにかなへらん女のためしには、あが、左近の局をやとり出で侍ると、安藤爲章のものせしを、此處に、また、ひきてかきつくるに、此左近の局と申すは、村上長治の家に生れて、形より初め心ざまいみじうめでたく、うるはしく、あげまきの頃より近衛殿下の櫻の御所に召し出でられ、秦姫君の水戸公へわたらせ玉ふに從ひまつりて、光國公より次の主君にまで、かしづき

つかへ、年久しき殿づかへの程、限りなき人のまじらひにつゝしみ怠らず、起居振舞のしとやかなるは云ふも更なり、言葉づかひのやさしく、うや〳〵しく、數少く、紫女のいひけんいと口惜しきねじけたるふしは露なく、主君にも、人にも、ひとへにまめやかに、靜なる心のおもむきを守りて、よろづおいらかに、のどやかに、われさかしくして人をなきになさず、おもにくゝひき入らず、またさうなくはさし出でず、よき程にをり〳〵のありさまに從ひ、朝夕にうつす鏡のかげ、おきふし露のたえまなく、かしこき事を一重に己れに求めたるに、人々も皆かんじ〳〵て知らず〳〵ねじけたる人も、心直くになりけるは、かの麻の中の蓬。芝蘭の室に入りて久しうして自ら芳ばしと云ふ例にもれざるものならし。

光國と姫君との御さえある妹背の御中にならびて、もとよりのさとしきも、折りあひたれば、五經三史のみち〳〵しき書をよみ、古へやうのまことのすじを、こまかにまねび、りちのしらべは女のものやはらかに、かきながしたるさま、聞くだにもやんごとなし。萬の事、物しづかに、至り深く、おほやけ私につけて、必ず耳にも、目にもとめて、とり行ふさま、實に男にしありなば、政事の黨に從容として、徽猷を贊襄し、必ず見るべきあらんと、安積澹泊ぬしのほめたてしも、過言にはあらずかし。

折り〳〵のすさびにつけて、よみたりける歌は一千首にも下らぬほどなりしかど、大方はみなその場ぎりにうち捨てゝ、殘るは僅にやまと歌三百五十余首、やまとぶみ六篇の、局の甥、村上時長、のち拾ひあつめて、心の花にぬる蝶の夢といふ歌の言葉を以て、やがて、蝶夢集と云ふ歌集になしたりとぞ

此の左近の局、かつてその姉なりける人の娘を養ひて、冨永大藏元長のぬしにめあはせけるが、はかなくなりしぞ口惜しき。その折りの哀歌に、

　ねぎごとも今はあだなれ露の身の消えてかへらぬ世のならひには

いかばかり甲斐なくや思ひけん。この局年老いては、髪をそりて尼となり、年七十二歳にしてみまかりしとぞ。法名脩元一靜大眞尼とぞ申せし。

　辭世

　またもこん人をみちびく元にしあらむ八の苦み絶まなくとも

局がよみし歌どもの中に、

　白蓮を

白妙のはちすが上の露のまもいさぎよからん心ともがな

　三十の年の元日に

思へ身に春はたつてふけふだにもとしのみちに叶ふ心を

上品上生の心を

ます鏡むかふ心のまことよりほとけのかげはうつりきにけり

述懐

露むすぶ草の庵のかりの世にしむしの夢めはなげかざらなん

などは、みな己が心に求めたる歌にして、後の人のいましめともなるべからん。また、

子の日に人々さそひて後楽園にあそびて

子の日して引手あまたの姫小松いづれの袖に千代をこむらん

橋螢

橋姫の思ひをうぢの河なみにもえてほたるのかげみだるらん

薄

我宿の一むらすゝきほに出でゝたのめもれかぬ誰まねぐらん

秋のけしきを

萩の露尾花がもとに虫鳴きて見せも聞せもあきのあはれさ

朝霜

吹きまよふ落葉が上も風さねてしづかにむすぶけさの初霜

　水戸へ下るとて長岡と云ふ所の松原にて

ときはなる君が御蔭にたちなれてさか行く末やなが岡のまつ

岩船の願入寺に詣で侍りしに松陰の岩根をめぐりて清水のながるゝを主の上人浣淅上人祝の瀧となづけたまふよしのたまひしかば

松高き祝のたきのしら糸は千代をかけてやむすびれくらん

　山里の花を

あはれとも誰にかたらん山里にひとりながむる花の下かげ

此終りのうたに山里とあるは、駒込の御別莊ならんと云へど、姫君のあらぬを思ひよせてからはさびしうよみ出でしにやと思ふも涙こぼれてなん。なほ、歌あまたあれど、此處にはもらしつ。

あはれ、左近の局は、誠に學問の道をよく知りて、女の道をわきまへしものと云ふべきなり。そも後の學せんものは、みなこの局にならひて、誠の學問を修め、女の才かしこきはなど、あなどりれとしめられぬやう、あらまはしと思ひてかくなん。

中村升子の略傳

ときはずの

中村升子は、常陸國久慈郡太田村の人、中村氏、茂高の娘にして、母を吉川氏といふ。其の人となり貞しく和らかに順にして、人を憐む心いと深かりけれど、僕從のものとも、みなこれに懷き從へり。其の年頃になりける頃、水戸の六町目なる栗田雅文に嫁けり。雅文の家は、もと信濃の望族にて、戸隱の別當寛覺禪師より分れて、常陸の茨城郡六段田村に移住し、天文元龜の頃に、右京亮、伊賀守などいひて、頗る富豪にてありしが、德川の中納言の君この國治め給ふ元祿のほどに、府下に來りて商賈となりしかど、遠つ祖より文字を好めるを以て、其の宗家に栗田の惟良などいふ著述にとめる人もありしが、雅文その惟良に何くれと聞覺えたる事ともありて、志氣すぐれたる人なりしが、早く其の父を失ひて、母、富田氏の手に敎育せられ、幼より家業に從事せしをもて、其の志を伸る事あたはざりしとぞ。爰に中村氏來り嫁ぎてより、富田氏に仕ふる事、實の母の如くなりしかど、一家和睦して、家業もさかりになりしかども、よく節儉を守り、糸くり機おりのわざより、子弟の敎育、また習字の事など、なにくれとせわしつゝ、また僕從數人の衣服の裁縫洗濯にいたるまで、いそしくものして、つゆ惰る事もなかりけれど、下婢僕從もみなよく働らきかしづけり。其の夫には朝夕の禮

儀違ふ事なく、殊に毎夕鮮かなるもの、何くれと作り設けて、酒すゝめ奉る事常なりしが、夜は縫ものなどして、人のねしづまる頃ほひまで、いそしみ其の餘暇もて書をひもとき、夜の曉るをも知らざる事たび／＼なり。かゝりけれど冬の夜のいと寒きになは寐もやらずて、保元平治の物語、源平盛衰記のたぐひを讀むを、こよなき樂しみとし、折々は源氏の物語の湖月鈔などこまやかに讀みて、そらによみうかぶる計りよく記憶し、其の子等には裁縫しつゝ論語孟子を敎へ、また義經爲朝の物かたりなどかたりきかせ、下々には、なさけをかけて、女どもには女の行儀を敎へいましめ、仁恕の心深くいとやさしかりけれども、また甲斐／＼しき處もありて、水戸の前中納言の君の賢こき御事を重みし奉り、奸邪の臣どもが、政のあしきを口惜しく思ひ、國家の御爲に、ひそかに神にこひのみ奉りて、誠を盡し櫻田の事に赴く義徒の爲に裝具の費用を助けたりしともありとなむ。氏は文化甲子五月甲子の生れにて、明治戊寅十月乙巳に七十五歲にて身うせたり。其の腹に四人の男子ありし、嫡は字を元吉、恭德といひ、次は亨次郎、直と云ひ、次は利三郎、寛といひ、次は貞四郎、貞幹と云り。恭德は家を嗣て、書をよむ事を好み古今に通じ、和歌をよくせり。直は龜井氏をつぎて、字書に巧みなるをもて稱せられ、寛は彰考館に仕へて、大日本史編脩の事にあづかり、後

敎部省元老院に召され、今帝國大學の敎授に任ぜられ、貞幹は、算術をよくし、氣槩もありしがさきに國難ありし頃、筑波山の黨類に抗して、身を果したり。かく四男子のそれ〲にかどあるも、中村氏敎育の然らしむるものならしと、人のいふをきくがまゝに、かき記したるものなり。

家政



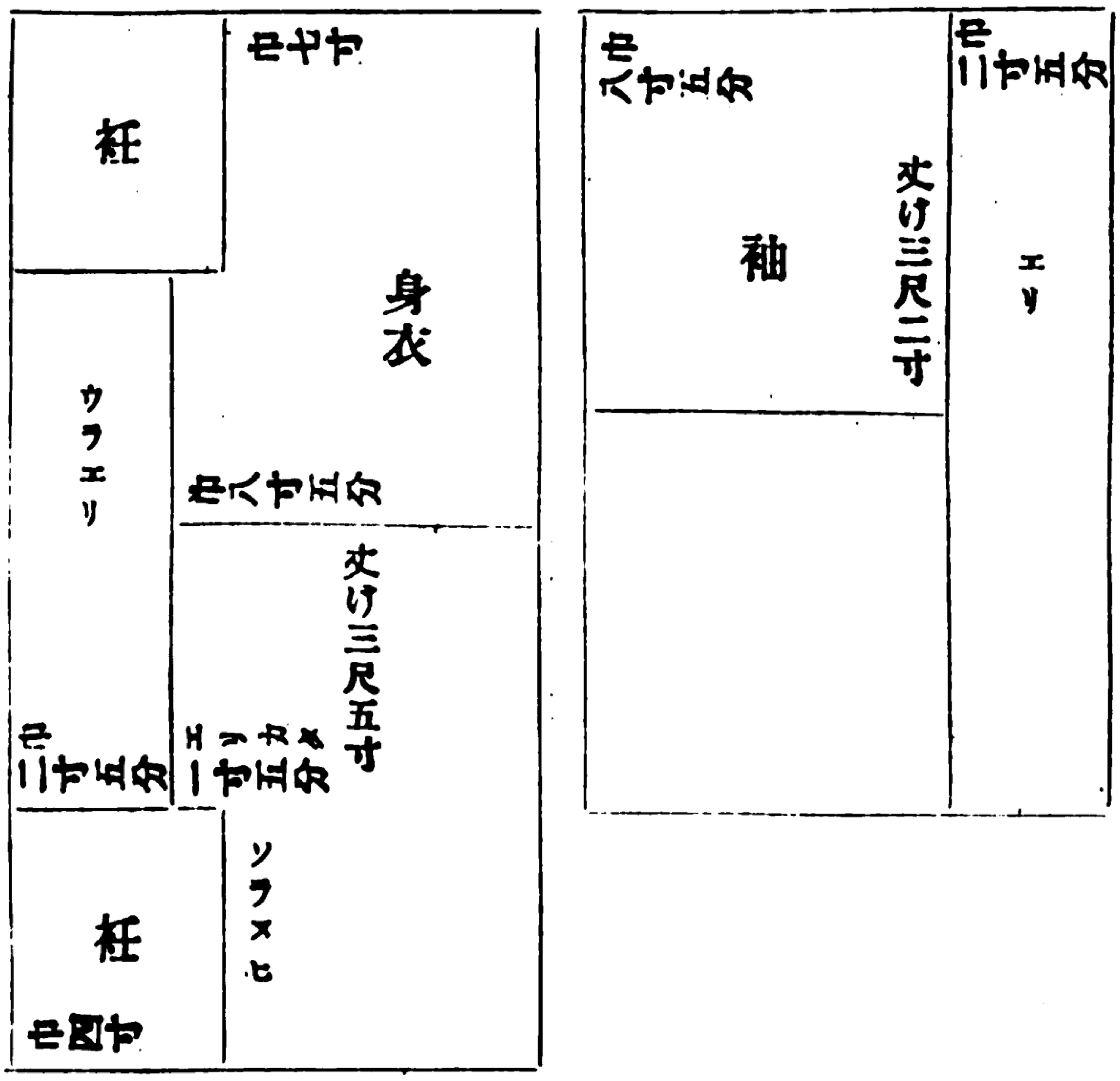
たちぬひ

西山たい子

（五十）八丈巾中裁

まづ兩袖分をとり、袖わきより襟をとり、その襟をとりたる後に、眞二つに切りて兩袖とすべし。さて、その殘りたる切れを、四つに正しくたゝみて、襟形の處を、四寸だけ横に切り、その切りたる所より、ふくろになりたる方を、縦に二寸五分を、眞直にかきとり、それを裏襟とすべし。衽は、四つ身の如くに、うらぬひにすべし。圖を見合すべし。

（八丈巾一尺一寸物中裁の圖）

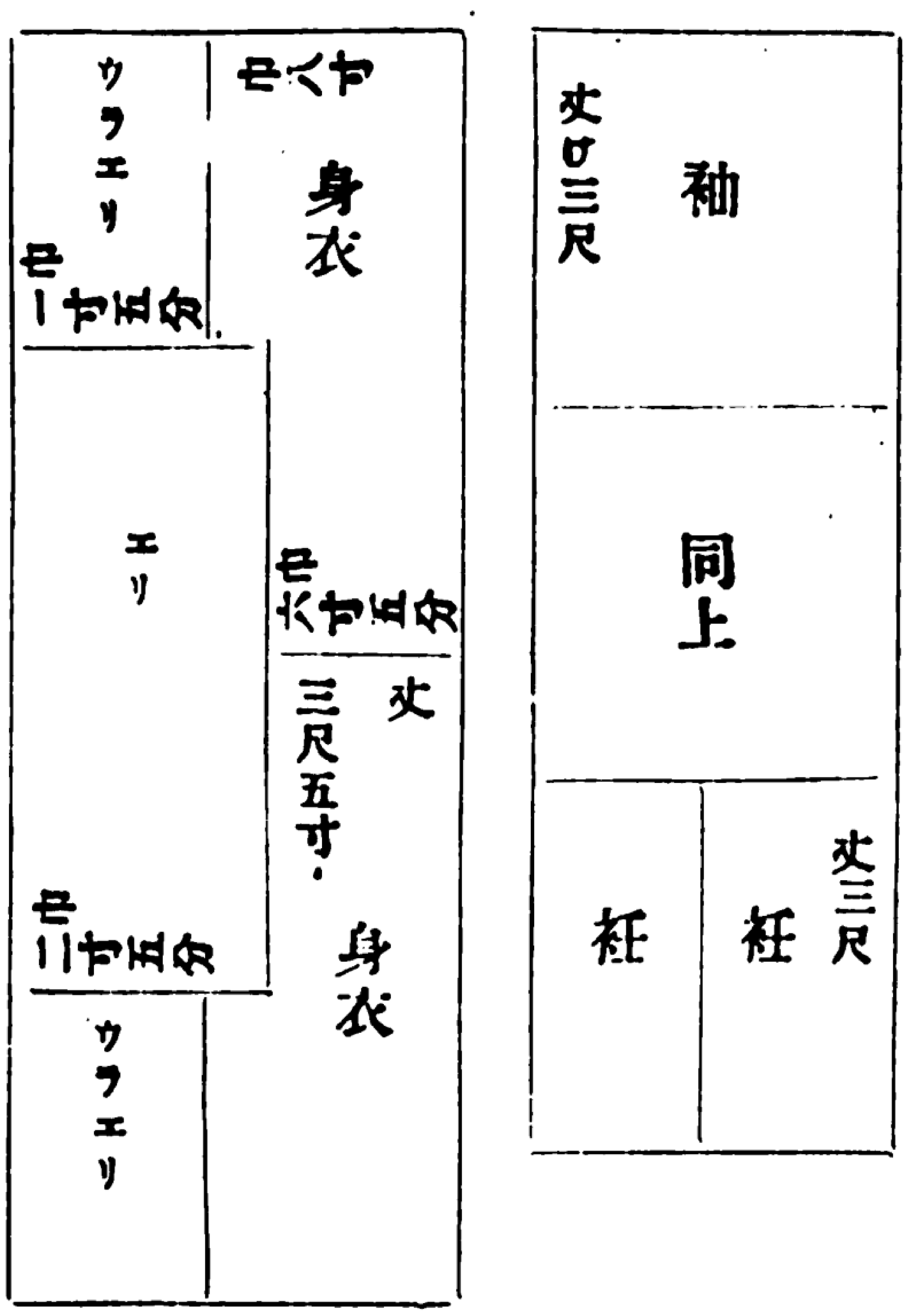


總計二丈四寸

（五十一）　並巾車裁ち

之も、例の如く、まづ兩袖をとりさるべし。それより、衽を巾にてとり、縦に二つに切り、その殘りを、四つに折りて、襟形の處を二寸五分横に切り、ふくろになりをる方をその二寸五分巾だけに眞直にかきとり襟とし、一方より一寸五分だけかきとりてうらゑりとなすべし。

（並巾車裁の圖）



總計二丈三尺

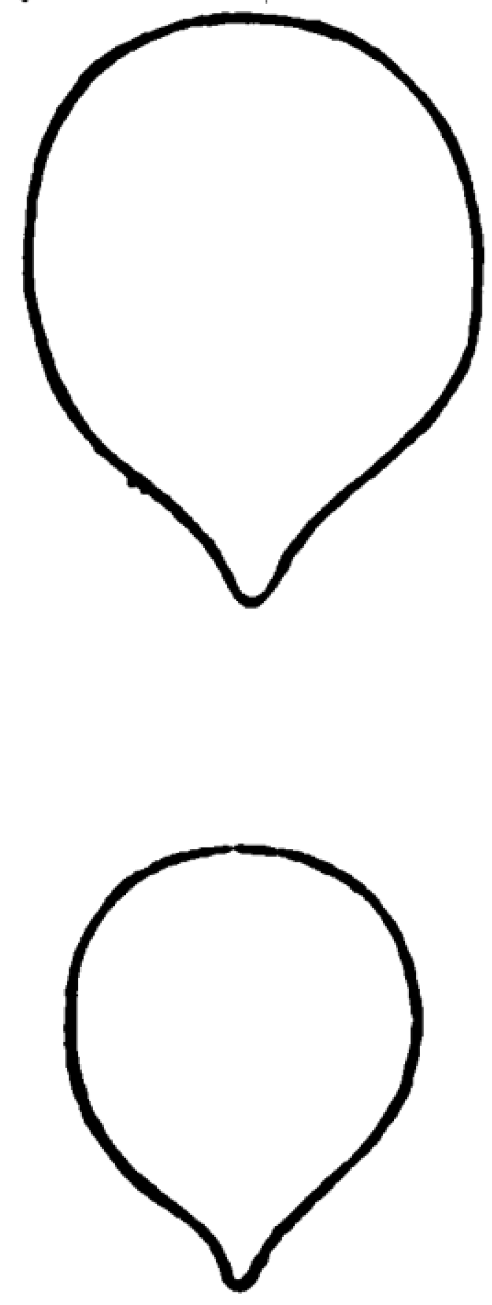
造花

伏見藤三郎

梅

満開の造り方。　花瓣は寒冷紗を用ゆ。寒冷紗は、先づ糊を抜きて、白梅はオウラミにて極く薄くそめ、紅梅はローザミンにてこれも仝じく薄く染め上げ、さて伸子を張りて、乾かし、後極薄き糊を引くべし、この色染したるものより、第二十五圖に示せる、大小二種の瓣數多を切り取り、（又は打拔にてぬき）之を一枚づゝ、少しく濕して、乾きたる布を疊みたる上に置き、其の儘掌に載せて、第六圖に

第二十五圖

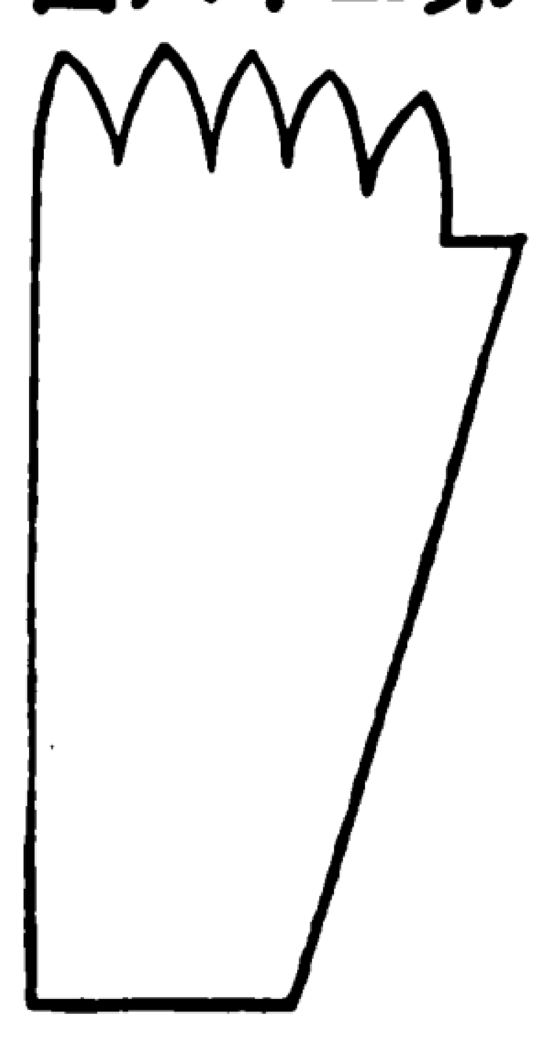


示したる瓣鏝（少熱したるもの）にて圓みを造るべし。（大瓣は鏝の大を使ふ。小瓣は小鏝を用ゐて、大瓣よりも深く凹ますなり。）

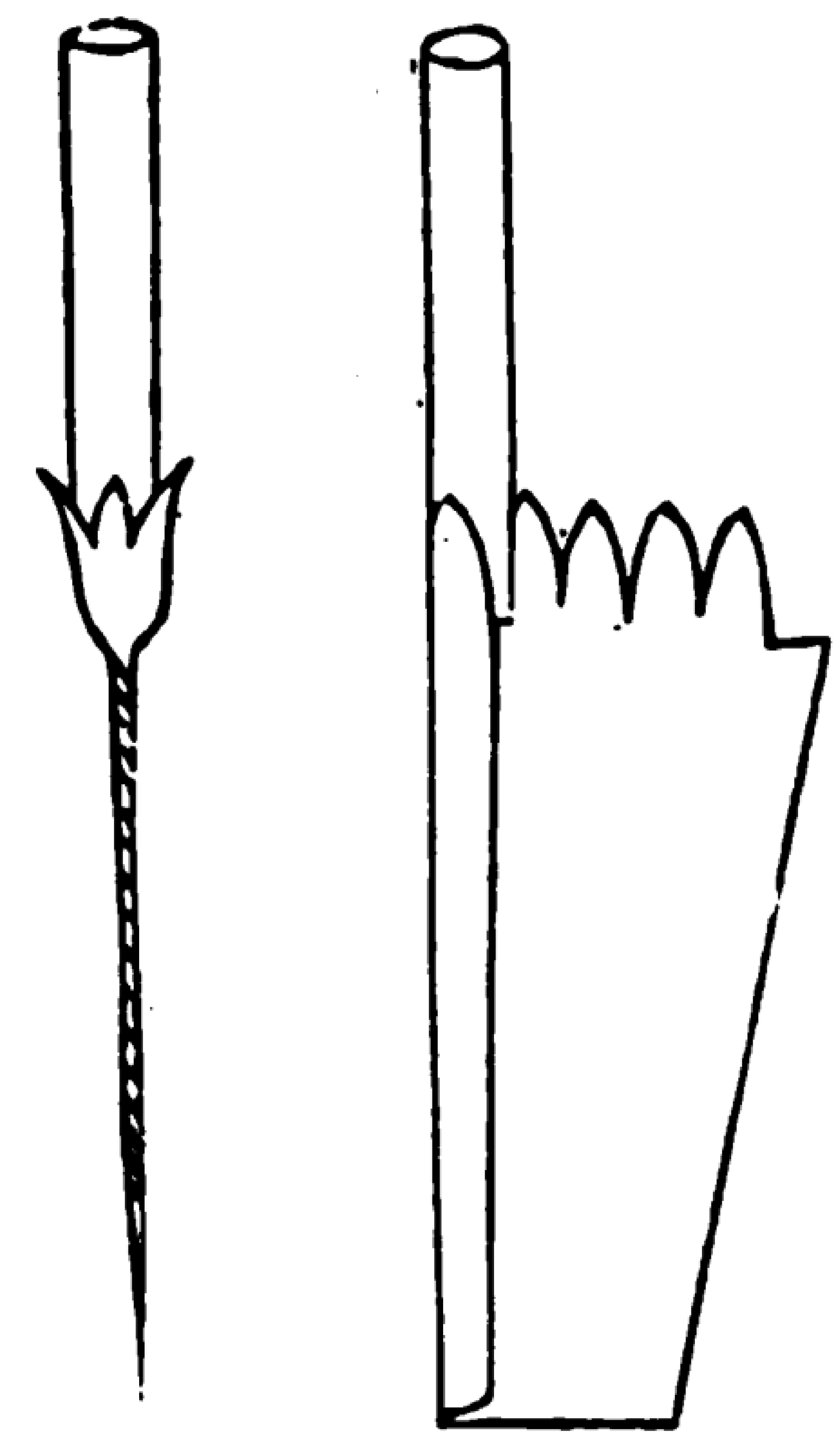
斯くして、一單のものは、この大瓣五枚にて造り、八重は大瓣十枚を二列に附け、其の中に小瓣五枚を附くべし。

蕚は、造花材料店にて販賣すれども、簡單なるものなれば、自ら造るもよし。先づ雁皮紙又は美濃紙の蕚水引を、第二十六圖の如き形に斷ち、之をグリン一分オウラミ五分の割合にて溶したる液にて染め、鋸齒狀の處、即蕚瓣となるべき處は、マセンダにて模糊すべし。之を第二十七圖の甲の如く、蕚となるべき處に細き捧をあてゝ之に巻き付け、其の端を糊にて付け、其の元は其の儘捨

第二十六圖



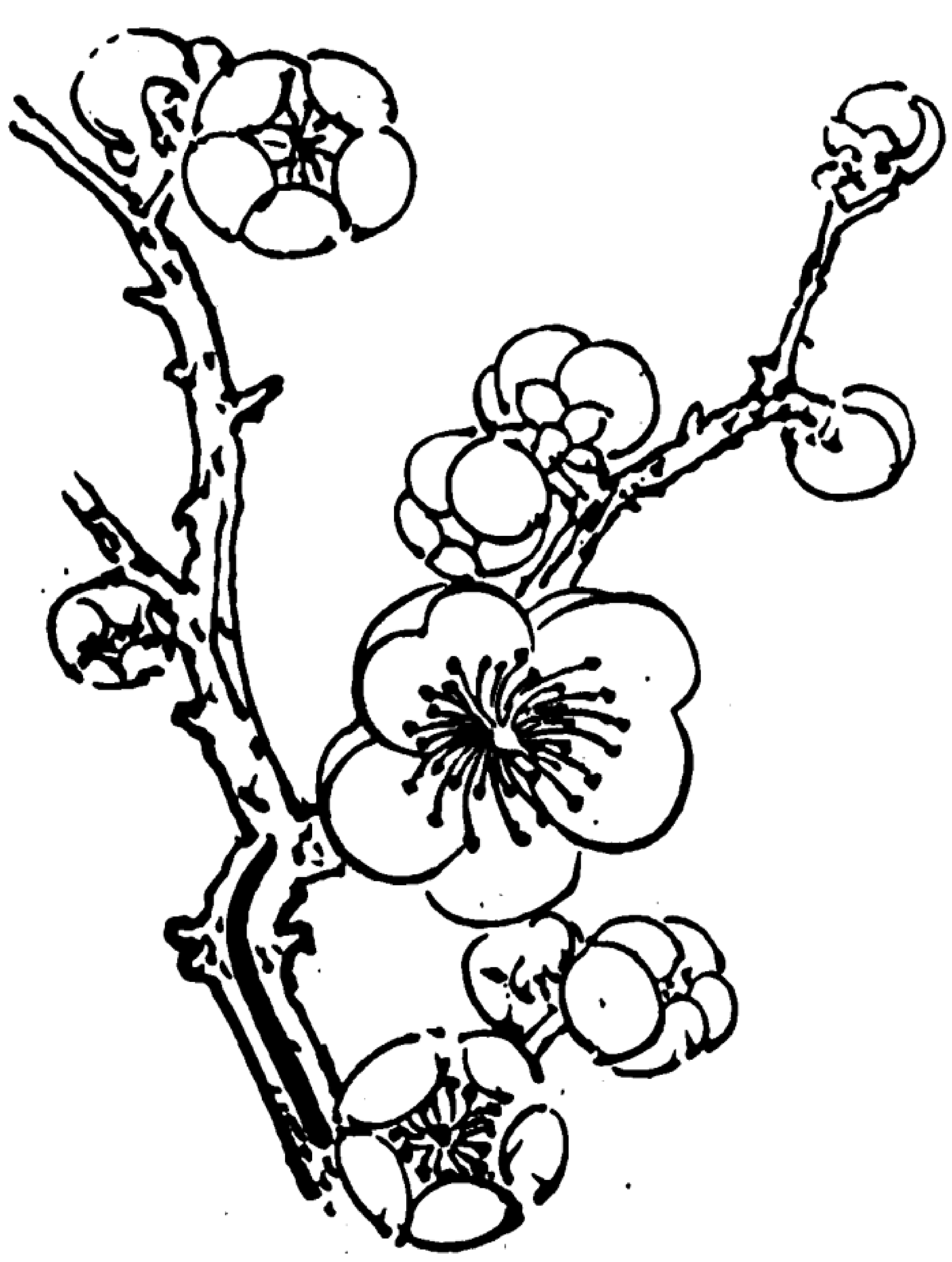
第二十七圖



甲　乙

りて莖となる樣、乙の如くすべし。
此の萼に花瓣を付くるには、萼瓣と花瓣の元とに少しの糊を付けて、萼瓣の間々に花瓣の行く樣にすべし。八重のものは、外部より付けて漸々内部に、各瓣の間々に行く樣に重ぬべし。斯くして後、此に蘂を付くるなり。
蘂は、白き粗毛(白馬の尾等)を凡四十本許、極細き針金又は糸にて束ね、適宜の長さに切りて、其の上端に少しの糊を付け、花粉を付くべし。
花粉は、先づオウジミを小許の水に溶し、之に米の粉を入れて色染し、再び之を乾して細末となしたるものなり。
半開の造り方。半開は、小瓣を深く凹ましたるものを以て造る。一單は五枚、八重は十枚を要すべし。

第二十八圖



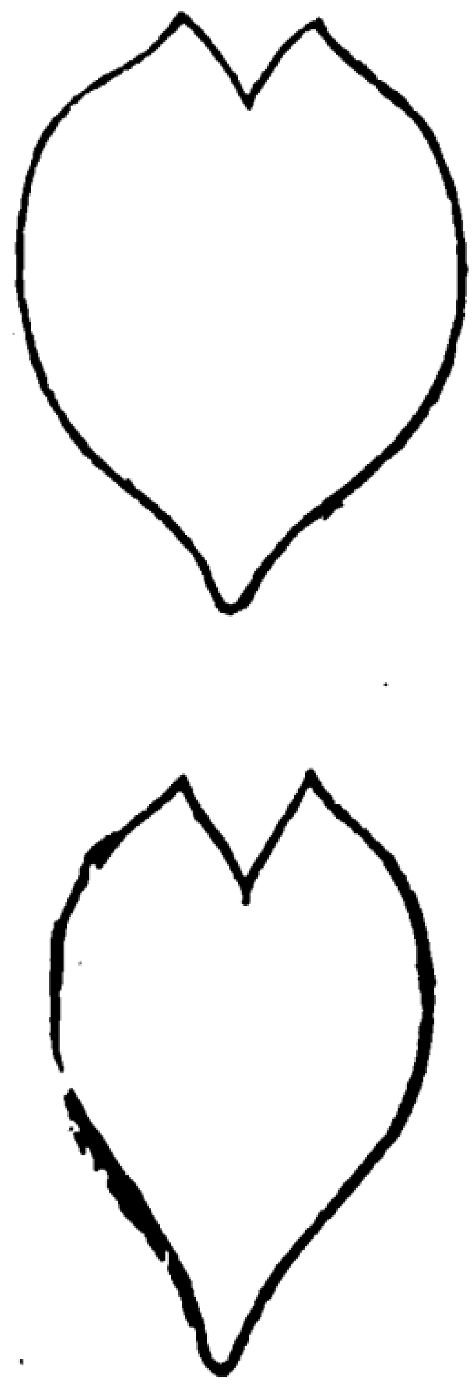
其の他は凡て滿開の造り方と仝じ事なり。
蕾の造り方。蕾は、綿小許を厂皮紙又は美濃紙の礬水引(紅梅なればローザミンにて薄く染めたるもの)にて包み、其の元を捻りて余りを切り去り、之

に蕚を付くるなり。斯の如くして造りたる花は、適宜の意匠によりて之を簪となし、或は梅の木に付けて造花となす。第二十八圖の如し

櫻

滿開の造り方。　花瓣の造り方は、凡て紅梅と同じ事なり。形は第二十九圖の如く大小二種に造るべし。

第二十九圖

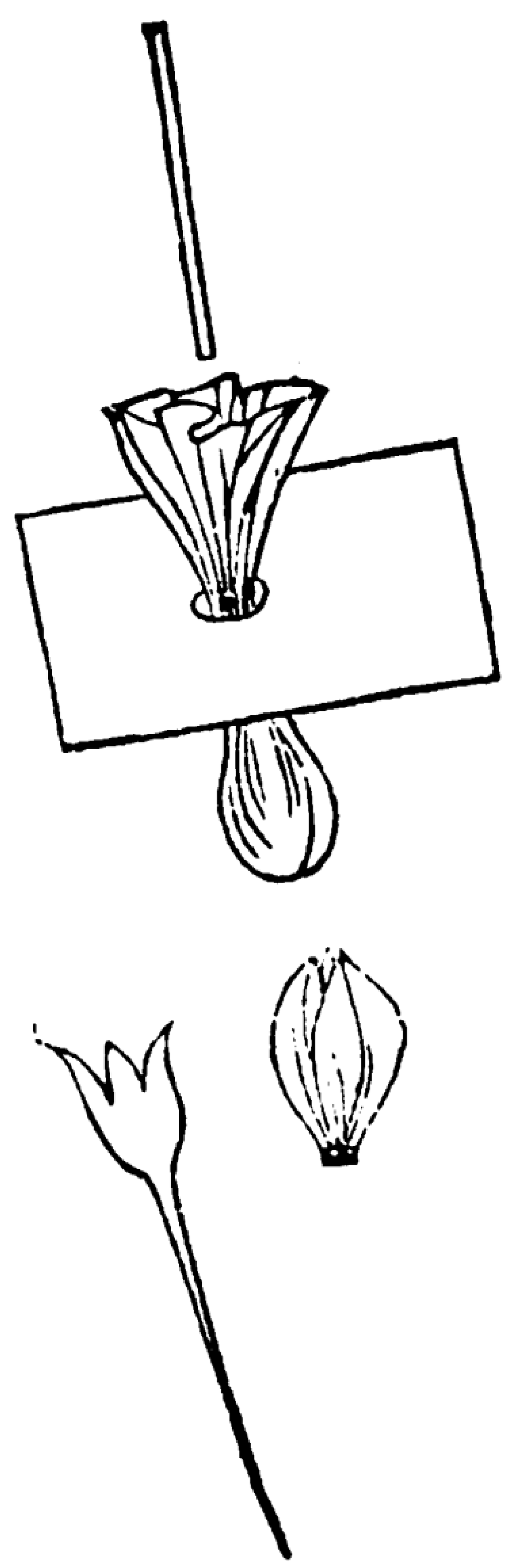


この形に切りたるものは、第九圖に示したる櫻鏝を用ゐて、瓣を縮らすべし。先づ瓣を布の上に載せ、少し燒きたる鏝にて其の一端をれさへて、引くときは、瓣は一方に縮まるべし、又之を裏反して他の端を縮らし、小瓣は大瓣よりも縮れを深くすべし。其の他纏め方などは梅の八重と異ることなし。蕚の造り方は梅と同じ樣にして、色はマセンダにて染め莖となる處は少し梅よりも長くして之に薄糊を引くなり。

半開の造り方。　は、梅の八重と同じ事なり。

蕾の造り方。　先づ厚紙の如きもの丶中央に小さき穴を明け、別に厂皮紙又はみの紙の礬水引をオウラミにて薄く染めこれに少しの綿を包みて、前に造りたる穴に差し込み、下より拔き取りて、其の元を捻り餘を切り去りて、蕚を付く、第三十圖を參照すべし。

第三十圖

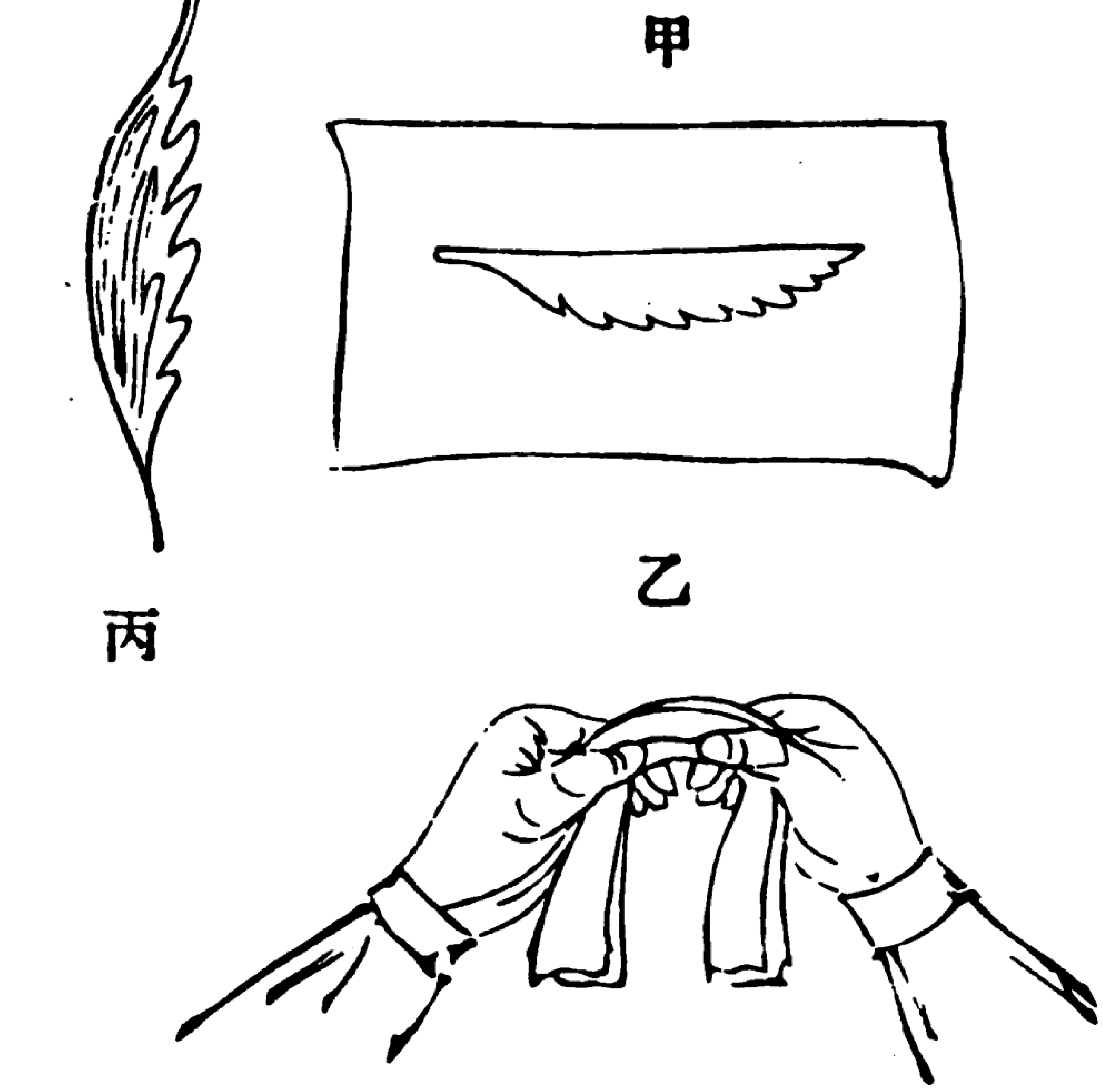


猶簡略に造るには、梅と仝じ樣にして少しく長目に

造るもよし。

葉の造り造。　礬水引のみの紙を、梅の蕚と同じ色に染め、實物と見合せて、適宜の大さに大、中、小三種のものを造り、各端をマセンダにてぼかし、之を二つに折りて、薄き布に包み、第三十一圖の乙の如く之をしばれば、葉は恰も丙の如くなるべし。

第三十一圖



斯くして造りたる葉は、各種三枚つゝ都合九枚を、小なるものより順々に、小さき針金に葉と同色の紙を巻き付けたるものゝ先に絞り付け、其の元に小さき芽葉を付け、薔薇の葉を造りし時の如く、蠟にて光澤を付くべし。

さて以上　滿開、半開、蕾などを纏めて、其の元に芽葉を付け、其所より少し離して葉を添ふべし。之を簪に作るには莖を紐護謨となし、實物に造るには、其のまゝ櫻の枝に付くるなり。第三十一圖の如し。

第三十二圖



だいどころ

牛酪入菓子

鶏卵の蛋黄三個、米利堅粉六十目、白砂糖三十目、酵母粉五分、牛酪十四匁を混和し、水を少しづゝ注ぎて能く捏ね、延板に粉をまきて其の上にとり、麵棒にて二分五厘程の厚さに延し、銅貨位の大さにきり、鐵葉皿に油を少し塗り、其の上に列べて、二十分間程焼べし、但し竈に入る前、上部に鶏卵を溶きて塗るも宜し。

薑入菓子

豚の脂肪三十目を溶かし、之れに糖蜜六十目と、茶椀一杯の水を加へ、更に米利堅粉一斤、生姜末三匁五分、白砂糖三十目、曹達二匁と、蕃椒粉少量を投じて混和せ、倘鶏卵二個を能く溶きて之に加へ、四五分間よく捏ね交せて、深き焼皿に脂を引きて、此の上に載せ、一時間程、文火にて焼べし。

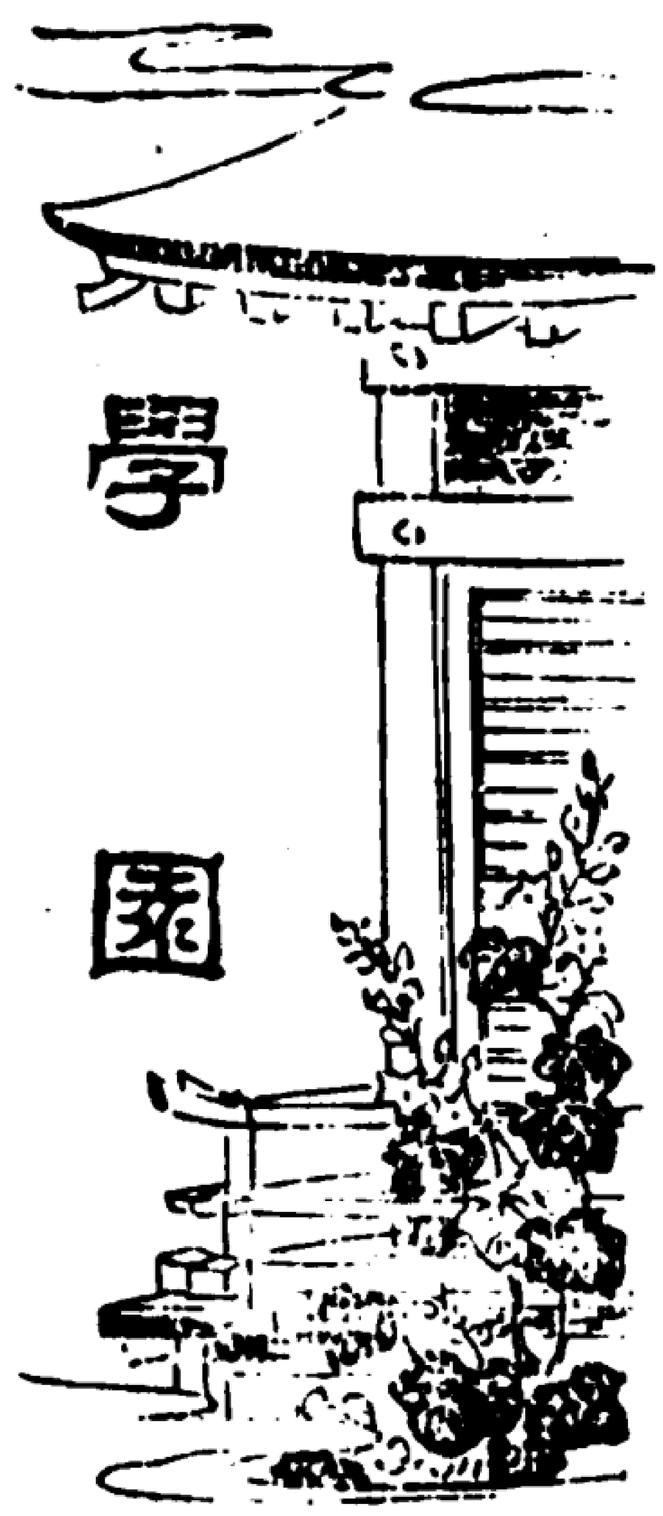
「リベス」菓子

米利堅粉一斤と、白砂糖半斤、牛酪半斤とを能く混和せ、牛乳一合五勺を温めて、炭酸曹達大匙一杯、酒石酸小匙一杯を投れて、其の沸騰するをかきまぜ、手早く一個の鶏卵と、前の混和せたる物を加へ、能く捏ね交せて、適宜の形に造り、鐵葉板に、油を引きて、上にのせ、其の儘竈に入れて凡そ一時間程焼べし。

米菓子

白米一合を能くとぎ、二合の水に食鹽少量を加へ、之れを炊き置き、別に柚子一個の皮を細かにきざみ、十分間程煮たる頃、鶏卵の蛋黄六個を入れて能くか

きまはし、これに、干柿二斤、白砂糖二斤半、牛酪十五匁、洋杯一杯の「ブランデー」と、炊き置たる、飯などを加へて能く混和せ、之を鐵葉製の皿に載せて、其儘三四十分間文火にて焼べし。



日本文典（二十）

鹽井正男

前に述べたる否定助動詞まじを、今は世俗にまいと轉じて用ふ。「見まい、きくまい、話すまい」などいふ。

なほ、否定助動詞に、「じ」といふあり。

じ。この助動詞は、いまだあらぬことを、豫め打ち消す詞、或は、ものごとを推量して、豫めそを打ち消す詞なり。此の詞は變化せず。即ち、活用せず。而して、たゞ終止の格に用ひらるゝやうなれど、稀には「思はじものを」といふやうに、体言につゞくことあり。

此の「じ」は、動詞につゞくには、その動詞の將然の格の下につゞく。例へば、伊勢物語に

なぞてかく逢ひがたみともなりぬらん
水もらさじとちぎりしものを

二人りして結びし紐を一人りして
逢ひ見るまではとかじとぞ思ふ

ぬれつゝぞ志ひて折りつる藤の花
春はいくかもあらじと思へば

おしなべて峯も平に成りななん
山の端なくば月もかくれじ。

一年に一度來ます君なれば
やどかす人もあらじとぞ思ふ

白露は消なば消ななん消えずとて
玉に貫くべき人もあらじを

昔、男、津の國兎原の郡に住みける女に通ひける。この度歸りなば、又は來じと思へる氣色を見て・女の恨みければ、云々。

二日といふ夜、男、われてあはんといふ。女も、はた、あはじとも思へらず。

君が名もわが名もたてじなにはなる
みつともいふなあひきともいはじ。
（古今集）

これらの例にて、そのつかひざまを知りたまへ。

三　推量助動詞

これは、或は想像助動詞ともいひて、すべて、目のあたりならぬ事物、志かと定まらぬ事物などを、志か〳〵あらむと推し量りいふ時、やかで、想像していふ時に用ふる助動詞にて、此の類には、

めり　らん　らし　けん　まし　べし

などいふ詞あり。

めり。その事物がさやうにあらむとは思はるれど、志かと斯くなりと云はれぬやうの時に、その事物は、左様ならむと、推し量り云ふに用ふる助動詞なり。此の詞は如何なる詞より出來たるかといふに、種々

の說ありて明かならず。そが中にて「見えあり」といふ語のつゞまりて成れるものなりといふ事、最よのつねに行はれた說なる如し。されど、其の說に從はゞ「雨ふるめり」といへば「雨ふる見えあり」といふ事の約まりしなりといふなり。また、或は、「む」と「あり」との二語の合せて約まりたるものなりといふ說あれど、單に「む」より轉じたるなりともいふ說あり、その云ふ所によれば「む」は極めて轉じ易き辭にして、且つ「む」は元來未來の動作をあらはす詞にて、決定せざる意に用ふる詞なり。故に、それより轉せる「めり」が、自ら想像の意をふくむやうになるなりといふ。いづれの說が、正しからむ。とまれかくまれ、現在の事物に就きて、推し量り云ふ詞なり。其の語尾は、

終止	連用	連体	已然
めり	めり	める	めれ

といふやうに變化して、たゞ此の詞には、將然の格といふものの無きが如し。良行變格の動詞を除きては、皆、動詞の終止の格の下につゞきて、この意をあらはすなり。例へば、伊勢物語に

あひ思はで離れぬる人をとゞめかね
わが身は今ぞ消えはてぬめる

昔、男、梅壺より雨にぬれて、人のまかり出るを見て、

鶯の花をぬふてふ笠もがな
ぬるめる人にきせてかへさむ

また古今集の名高き歌にも

立田川紅葉みだれて流るめり
わたらば錦中やたえなむ

土佐日記にも七日の條に

童言にては何かはせん、嫗翁にをしつべし。悪しくもあれ、いかにもあれ、便りあらむ道らんとておかれぬめり

源氏物語にも、若菜の巻に、

尼君、そのほどまでながらへ給はなんとのたまふめりき。

その他「見ゆめり」「いふめり」「行くめり」など、よくいふ所なり。これらにて、そのつかひざまを知りたまへ。良行變格には、その連體の格の下につゞきて、この意をあらはす。例へど「ありめり」と云はずして「あるめり」とやうに云ふ。ありは終止の格にて、あるは連體の格なり。

らむ。　この推量助動詞は、俗に「であらう」といふ意と全じにて、現在しかあらむと思はるゝ場合に、わが然思ふ通りに、そがまゝ推し量りいふ詞にて、これは、もと「あらむ」といふ語の「あ」の略かれしものならむといふ。

動詞につゞく有様は、めりの所に云へると、全同様なれど、新しう云はず。その語尾の變化するさまは、

終止	連体	已然
らむ	らむ	らめ

と活くのみにて、將然の格と連用の格とは見えず。

春日野に若菜つみつゝ萬代を
いはふ心は神ぞ知るらむ　（古今集）

問へどいふ問はねど恨む武藏鐙
かゝるをりにや人は死ぬらむ　（伊勢物語）

風吹けど沖つ白浪立田山
夜半にや君が獨り越ゆらむ

（仝　上）

君により思ひならひぬ世の中の
　人はこれをや戀ひといふらむ。。
（仝　上）

大原やをしほの松も今日こそは――
　神代のことを思ひいづらめ。。
（仝　上）

袖ひぢてむすびし水のこほれるを
　春立つ今日の風やとくらむ。。
（古今集）

これらにて、大かたの用ひざまを知りたまへ。なは此のらむの上にぬ或はつといふ助動詞を置き「つらむ、ぬらむ」など云ふ時は過去の事を想像し云ふやうに成るなり。例へば、古今集に

鳴きわたる厂の涙や落ちつらむ。。
　もの思ふやどの萩の上の露

霧立ちて厂ぞなくなる片岡の
　あしたの原は紅葉しぬらむ。。

といふは、皆「シタデアラウ」といふ意なり。これらにて知るべし。

土佐日記と貫之（三）

鹽井正男

もろこしのむづかしき手振りをまねびきはふ世の中に、貫之がうつくしくもやさしきやまと假字もて、土佐日記を書き記したるゆゑよしにつきて、れのが思ひあたれるかど〳〵を、かつ〳〵述べ來れるが、なはいみじき一かどのいはれのつぐべきあり。そは、貫之が國風をいたくよろこび慕へることにて、それも、さむかりは假字がきにしるすもとともなりけむ。

貫之が、國風に深く心を留めたる事は、古今集のはしに書ける詞にても見るべし。彼れは、しきしまのやとの歌の功徳を、

　力をも入れずして、天地を動かし、目に見えぬ鬼神をも、あはれと思はせ、男女の中をも和らげ、猛き武士の心をも慰むる。

實に斡天旋地の大動力と稱揚し、天地の開けはじまりたる時より出で來にたりといひ、高き山も麓の塵ひぢより成りて、天雲のたなびくまでのぼれる如く、此の歌も斯の如くなるべしといひ、さるを、今は、その道、下ちに下ちて、

　色ごのみの家に、埋木の人知れぬ事となりて、まめなる所には、花薄ほに出すべき事にもあらず成りにけり。

いやしきたわれ男たわれ女どちが、あだなるわたりの玩弄物とのみなりはてたるを歎き、

　そのはじめを思へば、かゝるべくなんあらぬ。

と悲り、萬葉集のことを云ひては、

　君も人も身をあはせたりといふべし。

とて、遙に奈良の昔の國風の盛りし代を慕ひ、また、さる幸福なる時に生れあひたる人丸赤人の身の上を、うらやましきものに思ひ、また、いま八島の外までもあかき君が御代に生れたるかひに、今日あり難き敕撰集の事にさへあひけるうれしさを、

　たなびく雲の立居、なく鹿のおきふしは、貫之らが、此の世に、おなじく生れて、この事の時にあへるをなんよろこびぬる。人丸なくなりにたれど、歌の事とどまれるかな。

此の貫之が、立居去らず、起臥わかぬ朝夕の思ひ出、始終の悅びごとにこそとむかり、うち悅びぬるな

ど、彼れが國風を慕へる心のかをりは、げにこぼれてゆかし。

彼れが此の嬉れしき撰集の席に坐りたる初めての夜なりけり、時鳥の鳴きけるをきゝてよめる歌に、

こと夏はいかゞきゝけむ時鳥
　こよひばかりはあらじとぞ思ふ

すべて、ものごとは、心がらにあり。玉ちる露は、涙とも見るべく、たゞよふ水泡は、浮ぶとも見らるれど、うたふ鳥は、鳴くともきくべく、笑む花は、また、思ひの色とも見るべし。皆、見る人の心からなり。きく人の心によるなり。

貫之が撰集のこと取り行へる夜に、時鳥の鳴くをききて、今宵ほどの嬉れしくゆかしく面白き時鳥の聲は、嘗てきゝし事なしとおぼゆるとまでに、其の夜の時鳥の聲を、よろこびたるは、貫之が其の時の心ゆゑなり。昔も同じ時鳥の聲あれど、きく心からにこそ、こよひは殊に、こよひばかり嬉れしうゆかしきはあらずとおぼゆることさへもきゝたるなれ。彼れが常に慕ひ慕ふ國風の、敕撰集をも見るに至りて、さばかりのときめくけしきにも至れりしを、上なく嬉れしう思ひたる心よりこそ、さこそはきゝたるなれ。

詩文章の流行は、その頃よりのものに非ねども、この頃は殊に甚しくのみなりまさりて、詠むものは白俗の詩、作るものは四六駢麗の文、これならでは、男にも人にもあらず、やくなくくちをしき者の如く思へるばかりにて、さる手振りのみ、優なる如く云はれたれど、彼れは、何に、そればかりが優ならむ。しきしまの手振りとて、彼れに變りたる所、劣りたる節は、露も塵もあらじ。彼れが詩は人心之感物

而形於言之餘也といへる如く、わが敷島の歌も、亦人の心をたねとして、よろづの言の葉とぞ、なれりける。

といひ、何の我の劣れる所あらむ。彼れの優れる所あらむ、おなじなりと競ひ、土佐日記の中にも、その妻が、亡くなりにたる子を思ひ出で丶、歌よめる事をいへる所に、

かうやうの事、歌このむとてあるにしもあらざるべし。唐土も、此處も、思ふことに堪へぬ時のわざとか。

とて、我も彼れも變る所なしと競ひ云へり。而して、遂に彼の詩に六義といふもの丶ある如く、我歌にも、また、そのさま六ッあり。

一つにはそへ歌。　二つにはかぞへ歌。
三つにはなずらへ歌。四つにはたとへ歌。
五つにはたゞごと歌。六つにはいはひ歌。

なりといひ、しかも

からの歌にも、かくぞあるべき。

と、兒戯めきたる競ひにさへか丶づらひたる、彼れが國風を慕へる心の可憐さよ。實に貫之が世に稱揚せらるべき節、やがて彼れが尊かるべきかどは、實に此處にこそあるなれ。この國風を慕ひよろこべる所にこそあるなれ。

かばかりに國風を慕ひ、これを振ひ起さむことを志したるが故に、はた、漢文漢學の學才ありながらに、好みて假字文を書きたる所もあらむ。こ丶に述べ來れるは、おのれが土佐日記を假字もて書きたる貫之の心を推しはかりたるもののみ、なほ貫之の人と成り、貫之の歌の心などにつきては、ふた丶び新しう媛だちに申すべき時あらむ。



またぬ青葉（つゞき）

故人　香川景樹

二十日。河原の御とのより、れくなるおもと人して、うち／＼のみそなへものなにぞくだされし。かしこまりうけたてまつる袖の上に、所狭き露のいとゞ置所なきにも、わきて思ひたてまつりいづるは、前の河原の大臣の君徳大寺前右大臣實祖公なり。何事も大やう世にかからはぬ御心ぞせにて、引籠らひたまへる後は、いとゞとりかためたるかたを厭はせ給ひ、若きん達のひものをもゆるさぬものにればしいみて、よろづのけはなれたまふあまりに、年々御園生の花の宴るも、唯景樹を花見ざねとめしいでゝ、それがならびには、包子をもれなじつらにならさせたまひて、なづけものし給ひしなん、かたじけなしなど世の常なり。さる中にも、さきのをとつ年なるべし、わが岡崎を花のついでに訪はせ給ひ、いつよりことにうちとけれはして、月こそ主人なぞうたひ出たまひし、そのたかき御影も去年の睦月の霞がくれにあまぎらせ給ひしはや、及ぞぬ空をあふぎなげきて、またひきこね奉りし人も、亦今年の花とちりうせしなん、いふ甲斐なき世の様なりける。

まづゆくをまたひ／＼てつひにみな

とまらぬ世てそかなしかりけれ

けふの夕つ方なんもとの川邊にうつりいたる。とむかりのまに、荒れたる樣皆めの前のむかしにて、そゞろなつかしき中に、かも川の流をわけて、高瀬にれとすゑがらみの上こす波、たゞこゝもとにひゞきくるを、病のうちになき人の言へらく、阿の川音を聞侍るに、いとひろやかなる池のれもてに、たきつ瀬の流注ぐれもかげたち侍りて、其池すなはち極樂世界とればしくて、大いなる蓮の、いくらとなく浮びひろごりたる樣、いともたのしき心地するを、かうよるひる枕のものにきゝなずことの、嬉しくも心すゞじうなど、一度ならず事に觸れてはいへりしを、或日れのれきゝていへらく、いつの年も、この川浪をそものよりすぐれてかしましきものに、いとひやり給へるを、今年しも引たがへたるは、さるかたの過世こそれはすらめ。こはとりもなはさず、水想觀の意にて、そらに願ひても思ひ浮めつべき、佛の御をしへなるを、れのづからそのかたに聞ゐくるは、極めて彼のこゝのしなのきざみにうまれはさんなめり。そのいけ八功德池にして、其蓮七寶蓮花ならざらんや。彼の摩尼水の花間に注ぐ微妙の響なるべし。もしいのる甲斐なくて、此度かぎりならんにも、よにたのもしき御身の終なりけり。さりともまた此世の過世拙くはこそはわらめ。かむかり思ふにかなへる世の中を經たまへむ、今更何の別をかなげかん。この世の花に心とむるは、後の臺をろこなふ業とかうけたまはる。罪深きだにすて給はぬものから、猶輕きをころは佛もめやすく物したまふべかめれ。願くは一すぢにこそと、なまひじりめきてすゝめし事など、今日しも此の川なみのうちつけに思

返すもいとおぢきなし。

後の世にきゝすましけん川水の

　ながれはけふもれとづれにけり

觀水の法の名も、此意を思ひこめしなりけり。さてけふわたるまゝに、いとゞむせびあへず。

こよひこそきく人もなき宿に寐て

　思ふかぎりのねをもたてつれ

二十一日。例の詣てゝ歸來て、かたぎぬなど脱はなつかたてなるべし、人をよびたがへて、なき妻の名を呼ぶを、さる君いづくになど心なきをなどもはわらひのゝじる。かゝるろれわざのゑど〳〵わめるをきゝをりてなはよし、

よぶごとに答ふらめども聞えねど

　そらにて君も音をやなくらん

岡崎より人れこせたり。その使道に咲けりとて、藤の枝をり來れり。未だ四五寸ばかりだにえあらで、ふぐみがちなれど、めづらしければたむくべし。

わきもこがゆかりなれどや藤の花

　さきたるすゑろみじかゝりける

二十二日。今宵も例のむせびあかして、

ぬば玉のよるもなき世になりぬらん

　其夕より一目だに寢す

二十三日。

二十四日。大叶法師明日なん高野へかへりのぼるといふ時こそはあめれ、更にふりはへてものすべう思ひ願ひつる、なき人の月牌をゑるしをさめたべ、世々宿坊をたのみ來つる至光院にあつらふべけんや。未だれはやけならねど、去年の春うせたまひし母君のもひそかにものせん。今度よしゆきも、願どけの事ありて、伴登るべしや。これを施主せたの

み聞えて、ざるかたの黄金などつく。
高野山れどにのみ聞く玉川の
たましくあへるにこそありけれ

東海紀行

井上通女遺稿

書て、紹介しまゐらせし「歸家の日記」の著者井上通女が、よはひ二十二といふ年、京極侯の母堂養性院の召におひて、はじめて、讃州丸龜より江戸に上りたりし時、道々、ものしたりしは、即ちその紀行なり。その文は、通女が處女作と見ゆれど、いかゞはしきところなきにあらざれども、亦見るべきふしなきにあらず。是、こゝに、女鑑の一欄をかりて、諸嬢に紹介せんとする所以なり。

二藍生しるす

天の和らぐ初の年、霜を履みて、堅き氷にいたる比はひ、なれて、年ふる丸龜を舟よそひして、あづまの方に赴く。先、難波へとてこぎ出す。親、はらからよりはじめ、友とせし人などあつまりゐて、ころもでのたゞならぬもことわりなり。されどかう、かしこく、かたじけなき君の召に從ふなれど何か、別の悲しからむ。しかのみならず、御いつくしみある仰事のかずかず、身にれはねど、ころもにもたえざるこゝちす。かぞ、いろの、よく、その身をいたせなぞの教も、身にしみて、拙く、愚なる心のかぎりを盡さんとぞおもはるゝ。父親、ゐて下り給ふなれど、長き道も、うしろ安くて、大山によりかゝりたりとかやいふなるべし。いつしかど、くはたか心のみさきたちて、小ゆるぎのいそきに、荒き波風を凌ぎて出づれど、漂ひながら、いど、はしりゆきて、

故郷のかた、いや遠ざかり、島隱れ行く、はた、あはれなり。杜工部が、渭水のことをも思ひいださるゝ浪枕のつれ〴〵、そこはかとなき海の藻屑、かきあつめて、いさゝか、此のたびは、取りあへぬぬさにたむけ、十六日、午のすぐる頃、舟に乘りぬ。風烈しくて、舟たゞよふ。

しるべせよ浪まをよけて行く舟のこゝろしられぬ八重のしほ風

いざよひの月、浪にうつりて、玉の如くに見えたるが、風に碎けたるを見て、

風ふけば月にみがけるしらたまもくだけて浪のたつにぞ有りける

かくて、ねの時ばかりに、室津とかやにつきぬ。十七日、朝なぎに、室を出でゝはしりゆく。けふぞ、聞きつる響の灘を過ぐ、風も、なほ、昨日よりあらしとて、舟子どものゝしる。舟の、うち沈み、路なきまぎれに、かねて思ひし須磨の浦も見ず成りけれど、

かゝらずばいかに見てまし須磨浦うらみを浪によせてこそ行け

松の音、いと高う聞ゆ。五節の君のひきとゞめらるといひけんこそぞ、ふと思はるゝ。

琴の音をまつにこめてや今もまたたゆたふ舟をひきとゞむらん　（未完）

井蛙小錄（つゞき）

井上賴文

中秋

上田秋成

八月十日まり五日、あしたより空いとようはれたり、

故鄕人離かれ、こよひ月見んと云かたらふ。野や分まし、棹やとらせんといふ。翁、今は都住して、野山の秋ともしくもあらじ。みをつくしのほとりまで漕せんにはとて、輕らかなる舟もとめて、酒よき物などはとゝのへたるべし。五百津舟つとふ中を漕そけて、河尻にたゞよひ出ぬ。月はやく生駒根にさゝげ出たれど、夕汐滿たゝへ、風そよめくにぞ、蘆の浦廻きたなくもあらず。武庫の高嶺に入日のにほひのこりて、西の海はろばろと見わたさるゝ、帆手打つれて入來る大船、いざりすとや漕出るちひさき舟、秋の木葉のみだれに散うきたり。鴉のいづこにか、やどりさだめて飛かへる空、鷗のあさりすと、をりゐる渚、さしくる汐の波がしらに躍る魚の光は、昔もあまたゝび見しを、此夕べあそびそむるこゝちせられて、いともたのし。おのれよりさきにうかべし舟、あとより追くる舟、皆千里の外に心を遊ばしむとぞ見ゆ。絲あり、竹あり、ゑらべいとをかしうて、海の神をおどろかしつべし。月はいと花やかにすみわたるほど、宮人のかくる栲ひればかりの雲もなびかず、星の林のもみぢも、こよひの光にはまけたりな、風いさゝか吹いでゝ、波のあやいとよう見極めらる。暮はてぬれど、繞れる山はをぐらう成て、淡路島さすがに見えずなりぬ。友垣一人が云、こよひの遊び、誰々も心くまなくこそおはすらめ。唐歌やまとうた、きたなげ也とも打うめき出ばや。翁先よめと云。あひなの言や、昔の貫之躬恒にあらずば、こよひの影に光あらそふべきかは、洞庭西湖にこがれ出でたらん棹の歌も、醉のすゝみにこそ、ほこりかにも打出べけれ。翁が木の芽煎て、はかなうすさめるこゝろに、何でとかまねび出ん。舟のよそめば

かりに、歌やふみやはかなふ遊ぶらんと見おこせたらんを、ほまれにしてやみなまし、此さしあふげる影にも、面ふせつべきわざなれと云、一人が高らかに、棹にさはるは桂なるべしとうたふ、淀のわたりの夜ぶかきてふためしに、これをあはれがりて、人く々よまずなりぬ。月は中空にかゝやきて、わか〱とすみわたりて、常世のまろうどのかり〱と鳴て來たるぞ、いと珍らしな。海の色は靑にびのきぬ引はへたらんごとに、さすがに風ひやゝかなれど、きぬかさましと云べき人もなきわたりに、飲ほし、くひみちて、すゞろ寒しな。かつらやと舟ぞたをたゝきて、かぢとりにもうたへと云。かれも醉たれど、棹の歌をかしげにうたふ。須磨よりや明石よりや吹、西の風にいざなはれて、漕もてかへるほどに、夜は丑みつぞかりにや成ぬらんと云。

こしかた（一）

お、こ、

秋の夜のねざめに、わがこしかたのことゞも思ひめぐらしつゝ、

いまはむかしとなりにけり
　すぎこしかたのことどもを
おもひいづれぞわがうへに
　うれしきこともうきことも
つもり〱てうちいでの
　はまのまさごのかぎりなく
つきしもはてぬ我がおもひ
　つきしもはてぬわがこゝろ

わが祖父にておはしけるは、わかゝりし時より、文武の道にいと心をふかうし給ひしが、父にておはしけるは、もはら武の道にのみこゝろをそゝがせ給ひ

けり。これも、そのかみ、彼の黒船てふあめりか船どもの、我が海邊にさまよひ初めし嘉永のころのことにしあれど、國の内こぞりて、攘夷の論いともさかりにて、かりそめにも、もののふの家に生れたらんものは、みなそれ〴〵のたしなみなくてかなはぬ事なれどなるべし。

かくて、來へゆく月日のたゆたふまなく、世のさまのうつりかはりもいと〳〵、はげしくて、内外のことみなをさまり、明らけく治まる御代のいとものどけき春を迎へて、天の下の青人草も、みな大みめぐみの露にうるほひけるぞいとめでたき。

わが母にておはしけるは、つちのとみのとしに、父にておはしけるに迎へられ給ひて、あくるかのえうまの年の神無月にぞ、われをうませ給ひける。この年ごろのことども、のちにきゝ侍りしに、祖父にておはしけるが、母にておはしけるがわが家に入らせ給ひしより、日毎に孝經、論語、古今集、唐詩選のたぐひのやまとからのふみども、何くれとなく說き聞かせ給ひて、古の胎教などいへることの遺意をぞならはせ給ひけるとぞ。

かくて、われは、神無月の二十日まり五日にぞ生れける。この時、また、いともあやしかりけることは、祖父にておはしけるが許へ、酒井のなにがしとて、祖父に親しかりける人の許より、水戸の弘道館の記文の摺りものをおくり來しかど、そをくりひろげて見そなはさんとし給ひし折にてありけれど、やがて、わが、名には、その一字をとりて、弘の字をぞつけ給ひけるとぞ。このことは、祖父にておはしけるが、かくれさせ給ふころまで、時にふれ折につけて物語り給ひき。

烈女百人一首

橘の家主人

いつの世いかなる人のすさびならむ。この頃わが友の許より、烈女百人一首といふを示されぬ。その人悉く烈女といふ際のものなりや。其の歌はた烈女にふさはしき際のものなりや。われこをわくる目なく心もたず。もしかなはずといはゞ、烈女の字をぬきて、たゞの女とせむもよからむ。ふさはしからずといはゞ、空ふく風と見むもはたあしからず、たゞ古人の心づくしのほどを、かくてしみの餌とせむは心ぐるしき限なり。今や女鑑號を重ぬること百二十號々みな鑑となすべき女子の傳記二つぞかり掲げられざるはなし。さては愛讀の諸媛の中には、よくそを記憶せられて、何はくれの號にありき、くれは、何の號にぞやうにさたせらるゝもあらむ。されどかは已を得ざることなり。いかにといふに、そは傳を記さむが本意にて、こは歌を見むが本意なり。さても杉谷氏落合氏などのものせられたる百首もあれど、またそれに同じきもの出じとも限られず。されどこもせむかたなきことなり。いかにといふに、かは修身を本として、男女を撰ばず。こは修身にかけぬやうにして、婦人のみのを集めたるものなればなり。あはれ學なき身の聞見せばく、暇なき身の考ふることなり難く、たゞありしまゝにいさゝか思ふまゝを交じへてたるものなれば、僻言もとより多からむ。希くはさる方に教へ導きて、完全ものと助けなし給ひねかし。

平群千左登

旅人のやどりせむ野に霜ふらば
我子はぐくめ天の鶴むら

千さとは平群の朝臣廣成が母なり。廣成の幼き時より敎へ導くことさはめて正しく嚴かにして、よき友來れど何くれとあるじまけし、あしき友來れど深くたれこめ、臥處に入りてやめるが如く、食物の箸だにあげず。よりて自らよきにのみむかひ、あしきはならはずて、天平五年といふに、唐土の國に御使として遣はされ、人にもうらやまるゝ身となりにけりかくて難波より船出せむとするに、いたくいましめて、この御使に撰まるゝこと、人となりての面目なり。されど一たび麁忽のことあらむわが大皇國の耻辱となり、千代經とも雪ぐ折もあらじ。男子と生れては、万代に語りつぐべきよき名こそ望ましけれましてなれがよき名は、大皇國のよきはまれといふことを忘るべからず。今さらのやうにはあれど、女の思過してとこまへといましめて、さてよめる歌なり。子を思ふ心の切なる、今目の前の心地せらる。

今思ふに、たよろ人の親となりては、庭の敎ばかり重きはあらじ。誰しもあれ、わが兒あしかれと思ひてかにかくするものやある。されど過ぎたるは及ばぬにも志かじとぞ。かはゆし〳〵と只ひたすらにわが兒をめでいつくしみて、側さらずはなさず、なめぬばかりに育てあげて、まことの人といふ人になさむと思ふ心なかりせば、遂にはその兒に、いふまゝになり、おもふまゝに振舞ひ、いかなることにてもわがいふことと思ふことは、母の志給はぬはなしされもふやうにならしめて、思はぬあやまちを惹起すこと世にはいと多し。かくては鳥といふとも獸といふとも、ねなさぬことやある。されど愛の度といふことといとむづかし。過れどあまへ、足らねどそこねて

生ひたゝず。まして一人子といふものよ、世の親の目も心も奪はれ易きものなり。千さとはたゞ一人子を育つること、世の母に似ずて法いと嚴かなり。しかも慈母の情自ら三十一文字にあらはれて愛いとこまやかなり。心なき鶴群爲めに霜をも蔽はむ斗に。

蜘と蜂の話

三浦千春

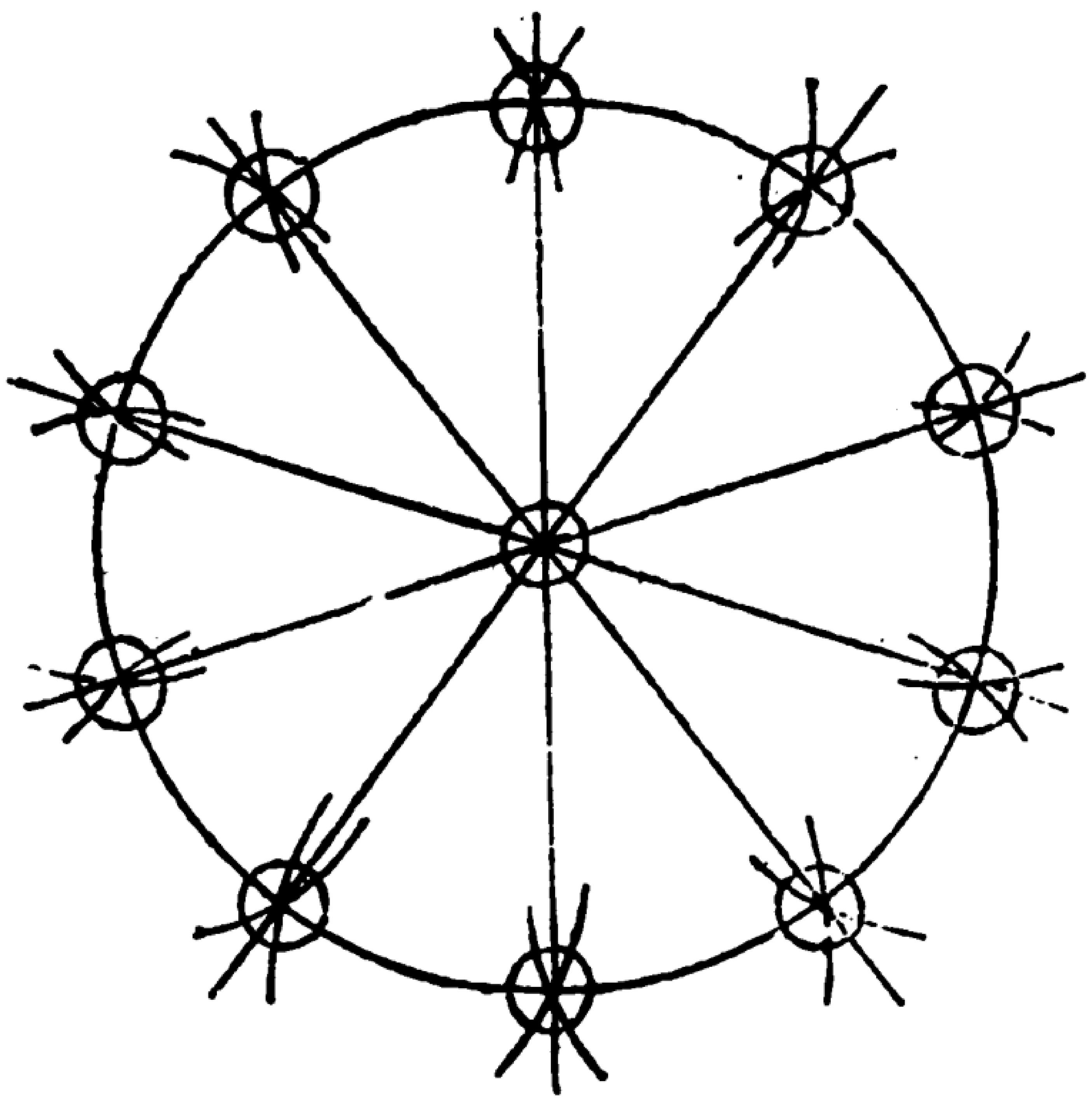
女鑑第百十八號に、白川樂翁公のねずみの談を出されたる、いとおもしろし。それにつきて、思ひ出せることあり。おのれ若かりしころ、美濃の國にありけるか、そこなる人の語りけるは武儀郡神淵村といふ所に、龍門寺といふ寺あり、其寺につかはるゝをのこ、夏の日ひる寐したりしがやゝ、目さめて、けぶり吹きつゝ、そこら打ながめて居りけるに、軒のつまの蜘のいに、ふと大きなる蜂のかゝりて、糸の網をやぶらむと、もがけども、得やぶらで、とかうするあひだに、蜘は得たりと、おのが尻より、あらたなる糸くり出し、この蜂を卷てめんとやそらよるよと見ゐしが、蜂はかくしもちたる、するどき針をさしのべて、蜘の横つはらを、一針しくと、さしとほせば、何かはもちてたまるべき、くもは其まゝ土におちて、うごめき居たり。やゝありて、かなたの芋畠に、はひゆきて、白芋の莖に吸つきて、其汁をすふさまなりしが、ほどもなく、針のいたみいえたりけむ。しづかに、もとの巣がきのかたに、這ひゆきてげり。かの男、これを見て、あやしきことにもある哉。白いものくき、能く蜂の毒をのぞくにや、人にもさわらんには、益あるべしと思ひて、みつから

ためしこゝろみけるに、はたしてしるしありけりとぞ、芋のくきは、田舍にてだつといふものなり。さる功能あるものにや。

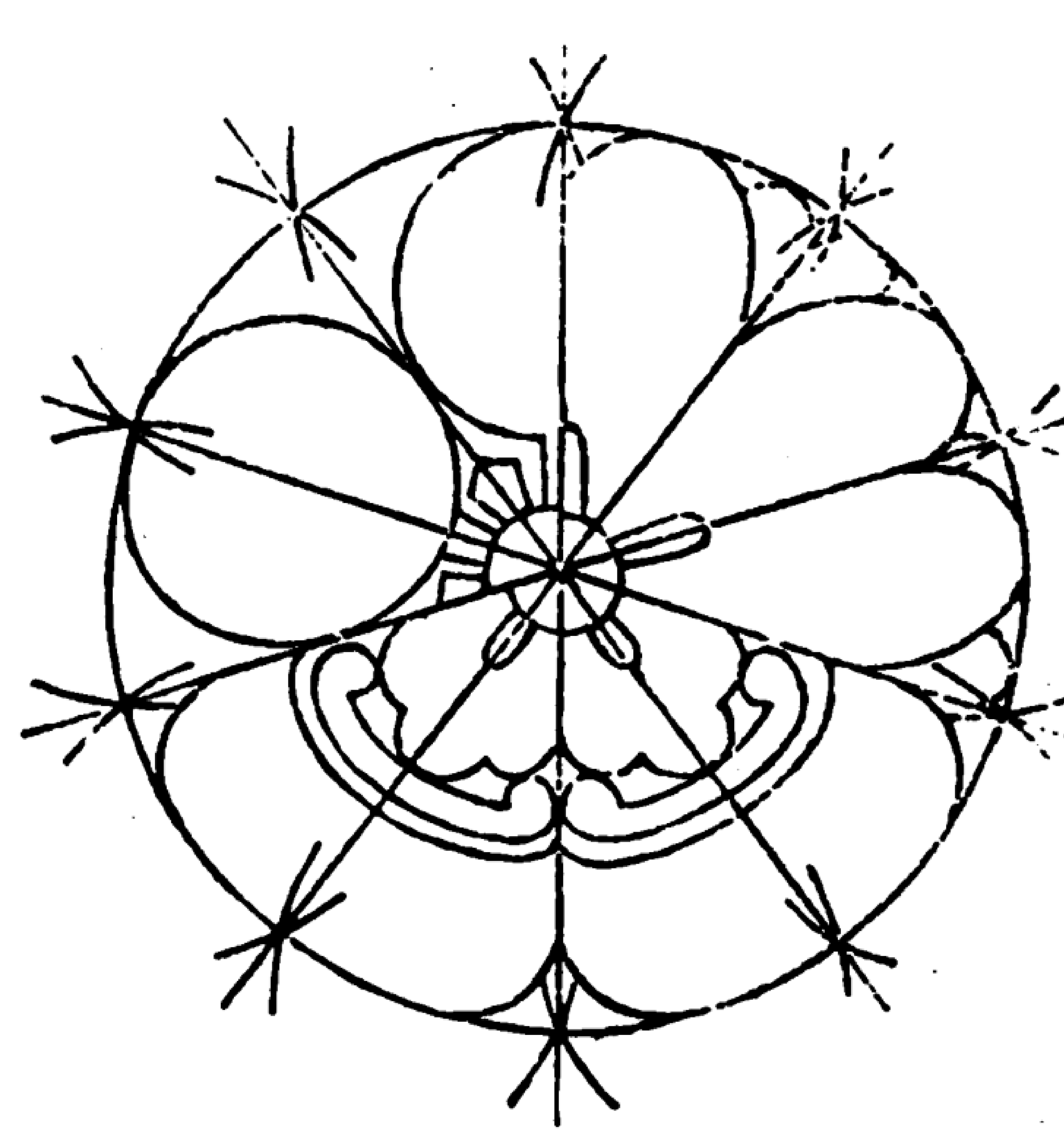
紋帳圖式綱目（五）

井上頼文寄贈

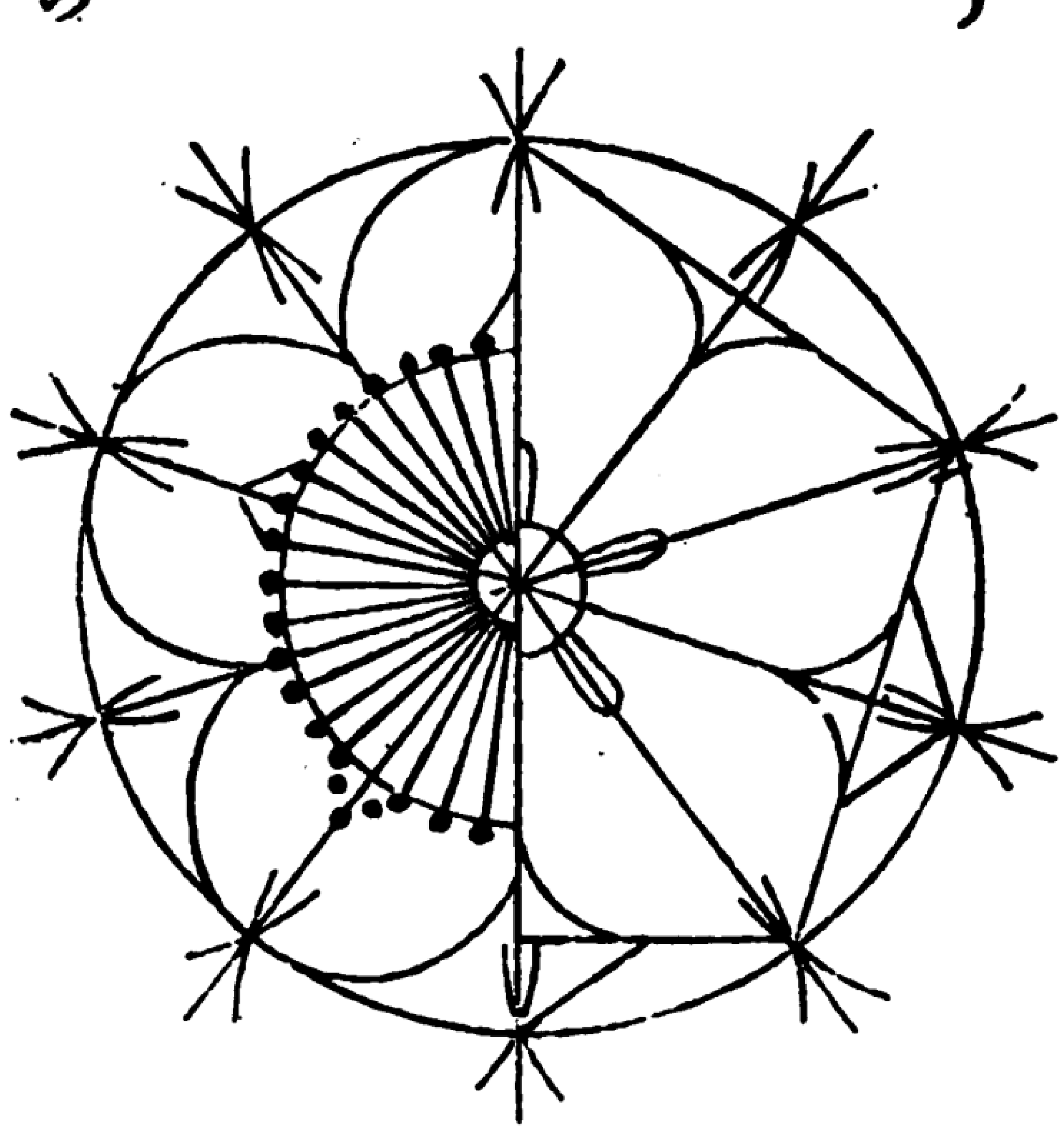
五ツ物　但し十割



さくら　梅むち

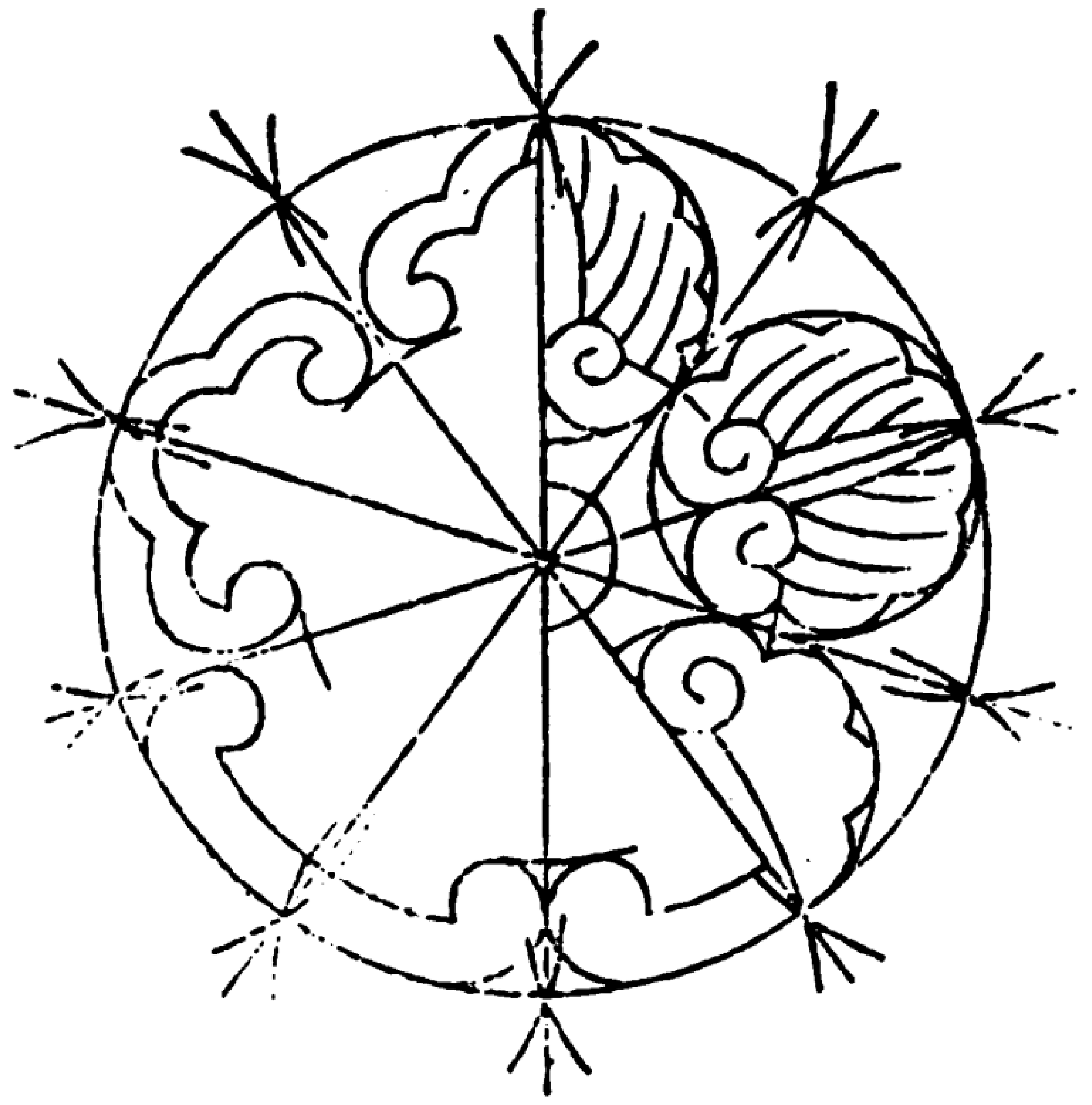


ききやう　向ふむめ

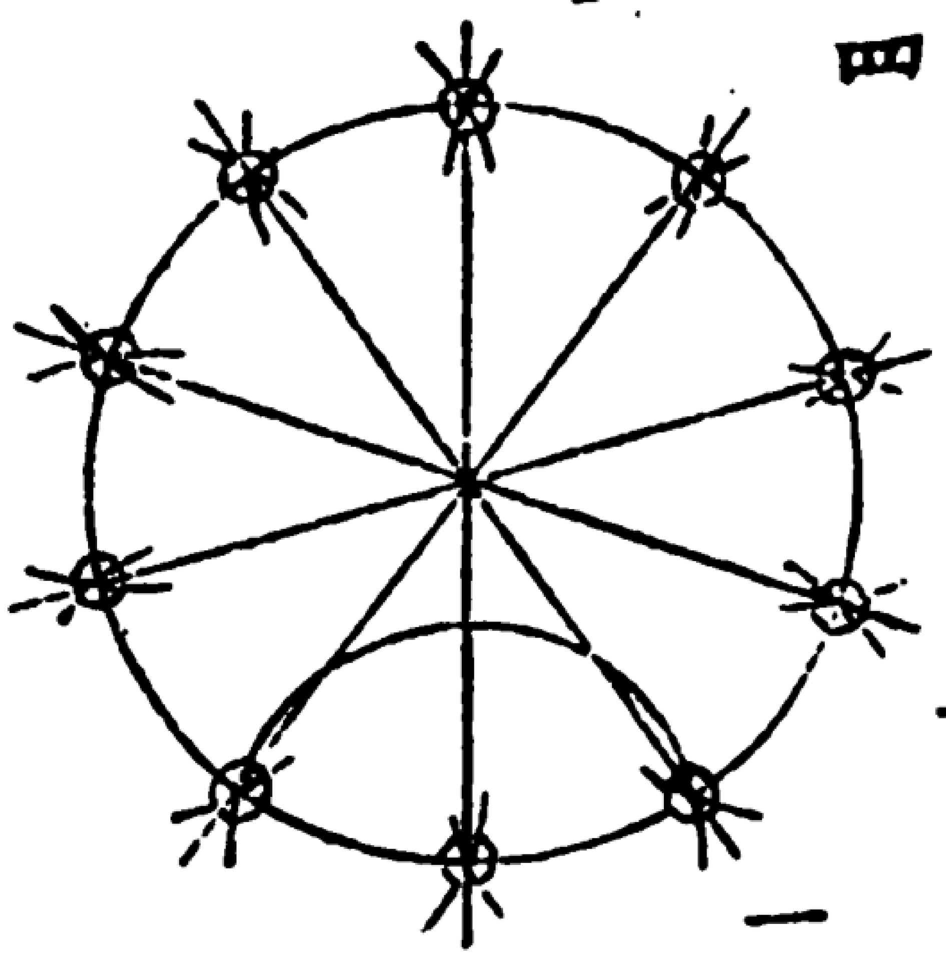


くは

五枚ひし



五ツからくわん



右の類はかくのごとく割るなり。割出し一二三四五、片はしよりよみ割りにすべし、若割方次第にかぞへ行きて、數不合の時は、分廻しかげんあるべし。

但割方如此。

譯直

田家男

私ハ行クベク持ツ。其ハ雨降ッタネバナラヌ。彼ハ僞ヲ話スベク餘リ實クアル。是從來英語の教授に行はれたる所謂直譯流の文体なり。嗚呼思へばをかしくあやしき文体なるかな。常に聞き馴れ云ひ馴れてさほどに感せぬ者だに少しく心を平にして之を聞かば定めてをかしからむ。あやしかるべし。況や少しも原書を知らぬ人々に於きてをや。所謂唐人の寢語を聞くこゝちして、其の意を解するに苦しまむ而してこのをかくしあやしき文体の文運日に月に盛なる明治の今日に猶其のあとをとゞむとは誠にあやしくけしかる事にあらずや。さは云へ余輩はもとよりかの洋學の一瀉千里の勢を以ちて我が國に注入し來りし時に當りて、このあやしき直譯流の能く無

眉の急に應じて功ありしことを疑はず。余輩は又英學の今日あるは、この直譯流があづかりて大に力ありしことを信じて疑はず。されど、是は一時の間に合せに過ぎざるのみ。決して完全なる直譯法に非ることとは、今更余輩の喋々するにも及ばじ。而して今日猶、未はか〳〵しく改良の實あがらざるは何ぞや。直譯法の不完全なる事は誰も能く知りながら、先入主となりし習慣のとかくに離れがたきも、其の一因なるべしと雖も、要するに完全なる直譯法を組立つる事の極めて困難なるに歸せずむあらず。余輩もとより其の困難なることを確信す。されど。直譯法の不完全は、實に明治文界の一大缺點なり。困難なりとて、豈一日も打捨てれくべけむや。余輩は、近年我が英學界の一部の猶つて此の改良に力を盡す傾あるを見て、私に喜に堪へざると共に、完全なる直譯法完全なる辭書の、一日もはやく世に出でむことを切望してやまざるなり。

東京廿四景（九）

蓬生屋女史

芝公園

こがねの柱、玉の床、流石にむかしの名殘かゞやくばかりなる徳川氏の廟、ことに二代將軍の靈屋は、日光の結構にも劣らざるばかり美しとぞ聞えし。增上寺の伽藍、新にたてられたれど、古より徳川氏の菩提寺にして、上野東叡山と共に世にいと名高き寺院なり。

二王門前の松原、風に老龍の吟をなして、心地もすがすがしく、神明のあたり梅いと多し。東風吹きそむる頃、園中の小高き丘陵にのぼり見れど、さながら

銀世界の心地ぞする。この丘を丸山と云ふ。老樹欝蒼たる中に、五重塔粲然として立てり。後は眺望よからねど、前は芝の町々より品川海を見下して、ながめいとよし、七個の砲台はかなき夢の名残をとゝめて、波の上に浮ぶさま、さながら大亀の如く、遠帆は坐し、近帆は行き、こぎいでゝこぎかへる船舶のいろしげなるに、あみをうつ海士もあれど、つりをたるゝ漁人もあり、貝を拾ふ少女もあれど、餌を運ぶ童子もあり。海士の家とればしき海岸の小屋に、たちのぼる朝げ夕げのけぶりもめづらし。春の花、



秋の月は云ふも更なれど云はず、冬の雪、夏のすゞみもまたことふりたれど云はずかし。此の丸山のうしろに池あり、赤羽根辨才天をまつれる處にして、世に出世の神なりとて、舊癖なる人の參詣するものいと多し、池中に蓮花多くして、夏のあしたは、ことにすてがたきながめなり。

朝露

柳子
櫻子

(其三)

かくて武雄は東京に出でゝ信夫と共に、一心に學業を勵みしが、みるもの聞くもの、鹽原に有りし比と變り、何れも〱めづらしく、日々勉學の餘暇には信夫と共に所々を見物する例にて、いつも信夫が案内者なり。品川に行きては海はかくまで、廣きものと知り碇泊の軍艦をみては、立派なるものとさとり我父とこの船にのりて、など思ひ出ては一際思ひまつりて、早う成人して、この船にのらんものと思ふ心いよ〱固うなりぬ。「日曜を幸に、花は散り果てぬれ、青葉のかげの水に映るもをかしからんと武雄は例の信夫を案内者とてし、向島に趣きぬ。折ふしこの日は大學のボートレースとて、觀覽人は山の如く、砂塵は吹きくる風にあふられて、所きらはず、目ともいはず、口ともいはず、吹きいりて、多くの人はそれ一樣に目をしたゝきぬ。武雄は二人して櫻の木の根に腰打すゑて、ながめたり。一發の砲を合圖に、赤青白と漕出せし、堤上なる學友は己の組を勝たせんと、聲を張上げ、旗を振りつゝ青ッ赤ッ白ッと叫びつゝ、走り行くさま狂人の如し、赤最早く、青はおくれて、こぎ出だす、白の組の人は

手に汗をにぎり、白を勝せんとすれども、いかにしけむ、はや間一間計り隔りたれど、はやこぐ勇氣もうせて、旗打捨てゝいづこへか漕去りぬ。

「すはや赤と青の競爭なるぞ、青勝たん、何ッ青ッ青はわれ〳〵あんなに、おろい勝もんか」「いや青だ」「青勝てッと」のゝしる聲の中に、見ん事赤は決勝線に入る一刹那、青を抽きて勝てり。赤萬歳の聲は四方に起れり。其組の人の喜びのさま、余所の人さへ自ら打笑まれぬ、早や日も西山に舂きてこの日の競漕も今や全く終れり。人々も波のよするが如く、歸り行く。武雄も人波をこぎわけつゝ、家路に向ひ、やう〳〵八時過ぎ家に歸りつきぬ。歸れば、母と妹より手紙のきてありと、叔母のいふに、嬉しくて開けば、

いつも御丈夫にて御通學のよし嬉しく存じ候猶此後も益々御勉强のやう祈り居候病氣の外は學校を欠席なされぬやう合せて申候追々夏氣に向ひ候へばあしき水など飮まぬやう可致候信夫樣とよく仲好くして立派に海軍々人となりてこの鹽原に錦をかざる事を母は今より樂しみに致し居候叔父樣叔母樣の御仰せはよく御聞きなされ必ず御違背なきやう御賴み申候近作の文章もあらば松助この頃上京致させ候へば其折引まとめ御よこしなさるべく候先は用事のみ別紙に愛子よりの手紙相添へ申候

母より

武雄どの

「ヤア愛ちやんもよてした、なんだらう」。

兄さん毎日學校へれ出なすつて御勉强遊すつてかあさまがよろこんで入らしやいますわたしも七月頃東京へいくかもしれませんうれしいのう〳〵家

のポチが赤と白の子をうみました

兄上樣

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

清子「マア武雄が返事をよこしたがだいぶ手が上つた。

御手紙拜見致し候母上樣には御丈夫にて御暮し遊し候由賀し奉候私事も信夫君と日々通學致し候へば御休神下され度く願ひ上げ候七月頃御出京のよし御待申上候父上樣御寫眞には毎日不怠拜を致し三時に菓子を頂き候節は父上樣に一番初め御備へ申候其折々は御笑ひ遊るゝやに思はれ申候

頓首

武雄拜

母上樣

（其　四）

太平洋の大嵐をものともせず。大山のやうなる、荒波を押分けて、進み行く勇ましさ　空は一面墨を流したるか如く、東も西もわからず風の神は時を得顏に吹きすさむに、さしもの大艦も此嵐には、木の葉の風に逢ひたる如く漂ひて、其上に日も暮れ方向も更に分らねど、只羅針盤と海圖とを力に、シンガポールへと志ざせど、荒き風には敵し兼ねて、マストは折られ、スクリウは破られぬ。デッキの上は打上がる白波溢ふれ、水兵は一生懸命にて、絶えずポンプにて汲み上るれども、其功少しも見えず。額に玉の如き汗を流し、黒ラシャの軍服は、潮の爲に宛らしぼる計りなれど、泰然として少しも動ぜず。非常の命令を傳へつゝ立たる年まだ若き一士官之はそも誰ぞ。海軍少尉候補生吉野武雄なり學校を卒業して之が始めての、遠洋航海、大いなる未來の望を荷ひ

乍ら、折もあらんに、この憎き波風の爲に、太平洋の海底に沈められ、惡魚の餌となる事かと、思へど扨も不運や。

忙だしく馳來りし一水兵。

「二番分隊士」と聲高く呼ぶ。「何か」

「只今當直して居るに、二三メートル先に能くは見えませねど、黑い物が流れるともつかず止まつて居るともつかず、見えます」。

候補生は。

「そうか」といひつゝ、急ぎブリッヂのアーク燈照らさせて見れど、黑き物體は、次第次第に此方に流れ來りぬ。風も稍々やみぬ。近かづくを見れど、不思議や、日本の小船に、人の乘れるが如し。船は彌々近づきぬ。「ソレ助けろの」命令の下に、第二のボートは下ろされぬ、水夫の三四人諸共に飛び乘りて引上ぐるを見れど、無慘や、此は蕾の花の乙女の死骸なり。綠の髮は風に梳られて、雪の額にかゝれる樣いと哀れなり。急ぎ軍醫長の室に伴ひ、當直の軍醫をして見せしむれど、未だ望ありといふ。吉野候補生は、側去らで打見やりぬ。やがて施せし藥の効現はれて、乙女は幽に目を開きぬ。赤かりし候補生の顏は、色靑ざめ。さしもの嵐に動せざりし體も、打ふるひて、何かいはんとすれども口に出でず、何思ひけむ、弱りたてし乙女は、其優しき目をパッチリと開き「兄さま」……の一聲に、ウエブスターの字書などとり散せし机の許に思ひねの夢は破れぬ。

武雄は今年十六才、父が形見の幼顏、今も殘りて、ていさましき好少年、海軍豫備校の本科も、滯無卒業して學校にある時も常に級長に擇されたるほどにて、此度の兵學校の試驗には天晴及第せんとの

用意怠らずやがて呉に旅立たんに、故郷より二百七十里も距たれど、其前には一度歸省して、母や妹の無事なる顔みんと、おもふ心は愛子よりポチが子を生みしと聞きし昔に變らず。思ひねの今のゆめ。我が望みの叶ひしは嬉けれど、もしや妹の身に何かありしには非ずやなど、心は千々にみだれ、頭もおのづからうなだれぬ。折しも荒々しく襖おしあけて半面を現したる信雄。

「オイ君ィまた例の考へ事か。モウいゝかげんにし給へ。君のやうに、さうマーザーやシスターを戀ひしがつてゐると、神經病になつてしまふぜ。オイ海軍大將どうしたんだ。今夜は月もよささうだ。九段あたりに散歩しては」。

朴平（七）

白魚女史

朴平が何くれとまめやかなる心づかひに、百代母子は、旅の疲れも、とみに忘らるゝならん、心地よげにうちくつろぎて、朴平と四面八面の物語り、文雄の歸りを待ちたるに、如何にしけむ、めづらしくも人は遲し。いたうもおそう入らせ給ふかな。今宵にかぎりて、さても、旦那樣の如何はせさせ給ひしならん。春野樣へまゐられしなれど、必ず引きとめられ給ひてにてはましまさん。なれど、またではにやあまりのおそさ。さぞや〳〵御まちわづらはしう。旅のおつかれも一入にておはすらん。あな、そや、車の音。此度こそは旦那樣ならめと、彼方此方に、心つかひもいそがはしう、朴平、手燭さゝげて玄關に立ち出れど、さはなくて、空しく車は行き過ぐ

るに、朴平、罪もなき車のおとを、うらめしげに、ゑむし見送りて、すご〳〵と力なげに立ち戻りざま時計ながめて、さても、もはや十二時にも近きに、常には、如何に春野樣のれ宅なりとて、九時をこね給ふ事は、露もれはさぬを。もしは、もしや、途中に、不時の事の。おないまはし〳〵用意深き殿にはれはすものを。いかで、さる事。まして、いつも彼の眞實げなる車夫にれくらせてはれこし給ふなれど。さはいへ、さるにても、心は勝手なるものかな。日來かくまち奉るほどの事もわりなど、さころは嬉しうも嬉しからんに、さはなくて、今宵に限りて。さても、世の中の意地のわろきものやなど、つぶやきつゝ、やがて、母子の前に侍りて、また何くれとなぐさめんとはすれど、心もれちつかねど、話しもすわらず、六十年此方わこがれし事なかりける朴平、

今宵のみはまちにまたれて、たま笹のたま〳〵ならぬそよぎにも、めづらしからぬ落葉の音にも、それかと誘はるゝ心のわりなさ。今宵初めて川岸のまつの心を思ひ知りしならん。返す〳〵もいたう待ちわづらはせ奉るかな。旅のれんつかれも、さこそならめなど〳〵、己が罪の如くにうちわぶる言葉にても、人のためをのみ思ふ忠僕の心こそは見ゆるあれ。いやとよ、朴平殿、さぞかり心をないなめられそ。旅とて、滊車の一はしり、疲れも何も侍らず。いつかは歸られんものを、なにいそぐ事かはと、百代の母はさすがにれちつきては云へど、心は中〳〵に空に迷ひて、わつき心にすゝむる茶も、菓子も、のんどに下らねど、娘はなほ更、立ち迷ふ心の行方や、はてなからん。何くれと慰め貌に、忠僕がとり出す歌やうの書物、手にはとれど、心にはね入らず。都





とは云へど、露も落葉も深き宿、月さへいたく更け行きて、千々にくだくる虫の聲、馴れにし古里の軒今宵はじめて立ち離れ來にし少女心には、身にしむものゝ限りもあらず。さびしうも心細うも、はてはかなしうも思ひ入れど、火桶の火さへ灰がちに見られて、いとゞ消えかへる心地。折りしも車のきしる聲。そや、此度こそはと、朴平が立ち出る玄關前、お歸りと、車夫の呼ぶ聲、いさぎよくひゞきたりしに朴平はさておき、奥の方にも心は飛び立ちしならんヤハ、朴平。まだ起きてか。さても、たいぎなりき。之はそちにとて　春野がおこしたるとて文雄がとり出す折り包み。いつもながらの春野のやさしき、朴平は押し戴きながら、傍におきて、今日は思ひがけぬまれ人のおはして、夕つ方より、殿をぞまたせ給ふなり。早う奥に入らせ給へと云ふに、文雄はいぶかしう、まれ人とは、誰ぞ。父ならで、文雄をまつものもなきにと云ひつゝ、から〳〵と機嫌よげにうち笑ひて、襖あけて入らんとすれば、やゝいざり出でゝ迎へたる百代母子の影、文雄の顔は、莞爾と微笑むと思ひきや、いとまじめにあらたまりぬ。さても、何故はや恥かしさに、母がうしろにうつむきたるまゝなる百代の方を、母はふりかへり見て、をかしの子やと一言はゝとうち笑みて、さても久しう、文雄どの。こたびは俄の上京、さてこそはおどろきもなし給はんなれど、さま〴〵の思ふ事の侍りて、今日こそは思ひ立ち侍りぬ。さるにても、むかし百代の手をひきて、野邊にすみれつみ給ひし文雄ぬしとは見まがふばかり、男らしう立派にてこそはならせ給ひたれど、とみつかく見つ、うれしげに、いそ〳〵と話しかくるを、文雄はたゞさゝとさし答ふるのみ

めづらしと見る氣色もなく、うれしと思ふけぶりはなほ更。女子のなれぬ旅、やつれいたはらんともせず、なつかしき故郷の人、とひたづねんともせず、言葉少くうち向ひたるが、はては、うるさしといはんばかりのけしきにて、つと立ち上りて、書齋に入りたるまゝ、また出で來らぬに、まさかにゆかり久しき君の訪れ、流石に、めづらしう思はすらんと、思ひ居たる朴平、また、いま更なる物思ひの加はりしもあはれや。

はかぐ\しく答へもせぬ文雄が姿を、きづかはしげにうちながめ居たる朴平、よもやと思ふに、入りたるのみにてまた出でても來ぬに、心は泣かんばかりに取り亂るれど、そつと立ちて書齋に入り、はや讀みかけたる文雄が机の上の書、しつかと閉ぢて、いつかな離さず。あまりに候、君さま。はるぐ\と、折角尋ねこし給ひて、しかも旅のおんつかれもいとはれずに、此の小夜ふくるまで、君をこそとまたせ給ひしものを。あまりと云へど、心なき御振舞。されが道に候か、義に侍るか。今宵はもはや一時、御書見の御ひまもなからんに、せめては御物語りどもして、御心をなぐさめ上げさせ給ひてもとて、はや堪へぬ涙、はらぐ\と膝をたゝきて、こきすゝむれど、文雄はにがぐ\しげに見かへりて、そちの知る事かは。やくなき事をな云ひそ。わが志たる道の研究、それ盡くさでは、とげではぐ\、かねてより、さぞかりにことわりいひてなるを、招きもせぬにさし出でたる見舞、彼方こそ心なけれ。心なきにあらずや、語るもうるさし。見るも苦し。そこ退け、わが樂みの妨げすなと、なほ傍の書取り出さんとする文雄の袖を、しかと押さへて、あな、そは、あまりの

御言葉。若君は知ろしめさねど、何も〳〵、此の老僕がはからひ申したる事、彼方より心なく來し給ひしにはれわさずかし、御わびは老僕の頭をろりてなりと致すべけれど、今宵は、久しき伯母御前にめんじて心よう語らせ給ひてと云へども、そちがはかりし事ならぞ、ろちがよきやうにはせよ。夜も更けたるにうるさし。己れは知らじそて離せと、袖あらくうちはらひて、机によりかゝり、うちむかひたるまゝ、見むきもせず。かく云ひ出でゝは一筋に引き動かすべきよしもなけれど、朴平はさすがに心を押しゝづめ、わざ〳〵とから〳〵とうち笑ひて立ち出で、さるにても重ね〳〵のあやにくさ。日來好み給はぬ御酒しひられ給ひて、いたう御むねのおしうて、御物語にたへさせ給はぬよし、伯母樣に、よく謝云うてとて、ふさせ給ひぬ。嘸やさぞ甲斐なく思召れんが、御酒のわざ、何事もゆるし給ひて、今宵は御休み遊ぞしてと、當坐をつくろふ朴平の心のくるしさ思ふにも、人は泣くらむを。

やまかはの
そこのさゝれも
かぞふへく
みゆるはみつの
すめはなりけり

(六帖詠草)

文林



秋水　近衛忠熈

さらぬだに清瀧がはのかはみづの
秋こそことにすみわたりけれ

山寺暮秋　久我建通

さだめなき時雨もはやき山でらの
秋のはてこそかなしかりけれ

秋旅行　毛利元德

我やどの庭の眞はぎやいかならん
あきかぜ寒し野路のかやはら

故鄕擣衣　佐々木高行

浦風の身にしむ志賀のふるさとに
ころもうつなりあきの夕ぐれ

庭上月　鍋島直大

雨の音のたえたる窓を明てみれど
つきになりたる庭のあさぢふ

海邊秋風　交野時萬

海士の子が磯べに出てもみち貝
ひろふたもとに秋かぜぞふく

庭女郎花　津輕承昭

女郎花つゆれもげにも見ゆるかな
ひとまつやどの庭のあさぢに

殘月　西三條實義

あさまだき起出て見れは山のはの
松の木のまにつきぞのこれる

俊寛　　防販忠元

樫の實のひとり殘りてしまもりと
成しやいかにかなしかりけむ

霧中山　　宮地厳夫

富士のねを車より見てはしりゆく
たびもたのしくなれる御代哉

雨中雁　　阪正臣

雨の音も雁の鳴くねも身にしみて
ふけゆく秋のよはぞわびしき

將門　　三輪義方

ひなののをえむし都になずらへて
咲きはこりけんれにゆりの花

秋雨　　柴田靜榮

なくむしの聲もとだえて荻のはに
ふるれどさびし秋のむらさめ

深夜月　　林甕臣

杉の森まつのむらだちはなれたる
月はにしにもなりにけるかな

秋夕　　同

あめさむきかはの中洲にしら鷺の
うごかず立てり秋のゆふぐれ

葦屋處女　　佐々豊水

ちぬあらしうむら風にも靡かぬや
あしやの松のみさをなるらん

浦松　　宇井正夫

わかの浦や鶴のやどりとなる松は
ともに千代ふる心地こそすれ

閑庭秋來　　木庭芳香

むぐら生の庭に玉しくをりもあり
秋來るあさのはぎのしらつゆ

貧賤親戚離　松本操

世のなかの人のこゝろは黄金のみ
はなさく家にれとづれぬらん

松島　伊藤信三

いにしへも今もかはらぬ八十島の
けしきもあはれ松がうらしま

岡紅葉　鍋島榮子

岡のへのすゝきのかげに染たれど
別てめにたつはじのもみぢは

海上雁　蜂須賀隨子

一行のかりのゆくへにかぎりなき
そらとうみとのはてをしる哉

月下擣　柳原愛子

くるゝまで招くと見えし秋の野の
尾花がすゑにつきぞいでたる

河邊菊　前田朗子

水そこのちりまで見ゆるやま川に
かげをうつして菊さきにけり

初紅葉　日野西廣子

たづねわびかへる山路の初もみぢ
色うすけれど手をりつるかな

田上雁　松平健子

あるこひく音もとだえて影ふけし
山田のつきにかりなきわたる

名所菊　下田歌子

岸づたひゆく人おほしれはゐがは
いはねのきくや盛りなるらん

山影寫水　小池道子

夕日かげいりてさやかになりに鳧
みづにうつろふ山のすがたは

月前霧　三宅龍子

海上をればへるきりもひさかたの
つきのかげにはさはらざり鳧

田家鹿　中島歌子

小男鹿のこゑきかぬ夜もなかり鳧
かどたの稲のほにいでしより

野虫　諏訪晴子

露しげき引馬の野邊をわけゆけど
千草がもとにくつわむしなく

秋野　清水静子

あきの野に立ち出で見れど七草の
ほかにあはれの花もさきけり

竹不改色　清水きく子

いくとせも變らぬ色をちぎりてし
みさをも見ゆるにはのくれ竹

水のわざはひ　三浦千春

地震といひつなみといひ、其わざはひの恐るべきは、いふも更なる事なるか又こたびの大水こそ、たとしへなき、禍はひのきはみにては有けれ、されどそは、天さかるひなのことにて、玉敷の都には、なゐもなくつなみもえらず、水の患もよそに聞て、うらやすく樂しく、内にゐては、夏は涼しく、冬はあたゝかに、よき衣を着、よき物をたべ、外に出るには、車或は馬車などにのりて、雨にも雪にもあたることなき、高貴なる孃たち、それにつぎたる郎女たちよ、わがてゝに聞ゆる、あはれなる物語をきゝたまへ、さてもこの、九月の六日より七日をかけて、降つゞ

く雨をやみなく、みのゝ國の西南の地は、川々の水嵩、いたくまさりたるに、又も八日の朝より、篠つくばかりふりしきりて、山々谷々より押出す水は、海のつなみに異ならず、土手も堤もいはゞころ、たゞ一面にあふれ來て、家庫宮寺のきらひなく、里といふ里みな水底となり、忽かぎりもなき、湖をこそなしにけれ、此大水に押流されて、しにうせける人の數は、かぞへもつくしがたし、中にも大垣今尾高次などいへる輪中は、ことに水深くして、大かたの家、皆簷を浸し、高地も、床の上四五尺水のりて、やう／＼二階ににげのぼり、危き命助かりしはどなれど、低き所にすむ民は、溺れ死しもことわりなり。さるに又十一日の夜、烈しきはやちの風吹れこりて、高さ八九尺もあらんとみゆる大浪、さながらいかづちのおちかゝる如く、打よせあれ廻りて、高次の町はあるかぎりの家、大かた倒れくつがへり流れ行て、跡方もなくなりぬ。此時死うせしもの、四十人とぞ聞えける、哀といふもおろかなり、たまたま木をよぢ、堤に登りて、辛きいのちを助かりしものも、よるべき家なく、食ふべき物なく、着る物も又あらざれど、そゞろ寒き雨の一夜を、やぶれたるひとへのまゝにて、うゑたる腹をかゝへつゝ、ぬれそぼちて立明しけるは、いかに苦しかりけむ、かよわき女わらべは、やがてそこに倒れふして、息も絶く々に、うめき居るなど、見るも痛はしく、胸つぶれぬべしこゝに高次にとなれる、札野村といへるところの、伊藤才治といふ男は、家の倒るゝ時、その母親の出おくれて、肩先をつよくいためけるを、我子の、まだ十二三ばかりなると、倶に助けて小船にのせ、やう／＼堤にこぎよせつ。折から岐阜より來

りける、醫渡邊なにがしにこひて、治療をもとめけるに、渡邊氏はいとねんごろに見て、薬などあたへ、手をもて痛み所をさすり得させけるに、嫗は泪をうかべてよろこびける。其時かたへに、かの小童の赤裸にてゐて、祖母をいたはるさまの、いとけなげなるを、渡邊氏はつく〲見て、あこはなどて着物はきぬぞ、母はいかにしつると、問ひけるに、母は夜前ればれ失せて、といひもあへず、さくりあげて、よゝと泣きけれど、渡邊氏も得たへず、ともに涙をそゝぎけるとぞ。あはれ才治の身のうへよ、つれそひし妻を失ひ、殘れる親と幼な子を、家も衣類も食物もなき、此水の中に、いかにせんとかまどひけむ。よそにきくだにむねふさがりて、こぼるゝ涙せきあへず、

うゑになき病になやめる親と子を
　覆ひ陰だにあらでこそあらめ

かゝるたぐひいと多くして、あぐるにいとまあらざれど、皆もらしつ、高次なる吉田利和といふ人は、二階ずみにて居て、

わだつみとあれにし家は水鳥の
　鴨居のうへに浪ぞこえける

とよめりとぞ。わがはらからは不幸にして、かくも悲しき瀬にたち、うゑにせまりてあるものを、たとひ百さと千さとの、道とほくへだつとも、よそのことゝ、聞すごしてありなむや。あはれ一トしづくの涙をも、かれに向ひて、れとしたまへ、姫だちよ。

雜報



●れはみめぐみ　また〳〵暴風雨の災にかゝれるを、めぐませたまへるは、
●東京五百圓●埼玉五百圓●群馬千五百圓●千葉五百圓●茨城千三百圓●栃木七百圓●石川七百圓●富山五百圓

○大庭の菊花　ことしは、いつもよりは、れひたちいとよろしく、本月二十日ごろより、咲きはじむべく、さて來月七日八日のころは、まさかりなるべしときこゆ。さて大内の菊花は、もはら青山赤坂の兩離宮にて、れはしたつるものにて、丸の内の宮城にては一本も培養せず、御叡覽には鉢植として、兩離宮より奉るものなりといふ。かくて最も巧をつくせるは、花壇菊にて、こは十一月十日觀菊の御宴をもよほさせ給ふ御料なりといふ。巣鴨二丁目にすめる、橐駝師保坂四良右衞門といへる人は、今の代にて、十五代うちつゞきて子孫栽菊の御用をうけたまはりて、つかへまつるなりといふ。いま大庭の菊花の御ありさまなりといふを聞くに、

●菊花の種類　は一萬幾千といふ程ありて、到底異種異類をわけ盡し難けれど、先ず大菊、中菊、嵯峨菊、平もの、丁子咲、七子咲、吹詰、薊菊、小菊、食用菊、小町菊、寒菊等なり、大菊と

は大輪にして、徑り一尺八寸位に開花し、伊勢、京都、大坂、金澤等に繁殖して、東京には少し、中菊は、狂ひ菊と唱へ、東京にて最も稱美するものにして、宮廷花壇の菊も亦是なり、嵯峨菊は一名糸菊と稱し、京都にて最も盛に栽培す、以上三種は花壇に作りて眺めとすべきものにして、其他は、園或は鉢に栽うるものなり、宮廷花壇の中菊の中、最もよきものは、移り白にて、一陽暑、赤にて小倉山、黄にて井出の玉川、白にて扶桑の峯、薄色にて煬帝の夢、樺にて盧山の秋、薄紫にて、旭の影と稱するものを以て第一とすといふ、

●菊花壇は、八ヶ所あり、中四ヶ所は、赤坂御所、他の四ヶ所は、青山御所にあり、今赤坂御所の分より記さんに、花壇中、最も大なるは長さ十七間、奥行三間にて、五側に栽植す、一側二十七本、俗に等作りと唱ふる作り方にて、樹は五の目に交植す、此總數百三十八本なり、花は何れも中菊の狂ひ咲にして、色は黄、赤、白、薄黄色、樺、薄紫、移り白等、交々取合を宜くせり○次は長さ十間、奥行九尺の花壇にて、三側に五十三本交植す、種類色取合せ前同斷○次は長さ五間、奥行八尺、花壇にて、作り方は鬢さしと稱し、上方五枝五輪を並列し、下りて五寸四輪を並べ、又下りて五輪を並べ、其間隙は、上方廣く、下方に從ひ、縮少して、其形恰も鬢さしの如くに作るものなり、三側に三十五本を植ゑ、色は何れも交りなり○次は長さ十間、奥行九尺の花壇にて、是は前のものとは全く異り、花も中菊にあらず、徑り一尺二三寸の大菊と唱ふる大輪物なり、壇數六側ありて、一側中、同じ色を並列す、即ち上方より

白、赤、黄、淡黄、樺、淡紫、移白等の順序なり樹の數總計百二十本●青山御所の花壇中、最も大なるは、長さ十五間、奥行三間にして、五側百二十五本を交植す、色は勿論交りなり、○次は横巾五間に、奥行九尺の花壇にして、此中に只三本中菊を植付け扇の字紙形に大作りに結び立てるものなり、色は黄、赤、白、の三種なるが、是は又一本にして、四五百輪花を附けたるものなれど、六本の樹も非常の嵩をなすものなり○次は横巾三間、奥行九尺にして、總計二十七本を二側に並植す、此樹は又繼分なれど、異彩燦然たるべきものは○次石臺植と稱し、巾五尺、長さ四尺の檜の箱を作り、此中に黄、白、赤、二種の中菊を植うるものにして、之を巾二間、高さ八尺に結び立てるものなり。

●故北白川宮殿下の御分靈式　故北白川宮能久親王殿下の、御分靈の御陵墓は、下野の國二荒山の内に、築き奉らんとて、工事中なりしが、さきころ以來、あめかせにさゝへられて、はかどらず。御式もしたがひてと延びたりしが、來ん廿四日、日光山内輪王寺門跡にて、行はせ奉るべきに定まれりといふ。かくて、この寺にては、華族女學校學監、下田歌子の作歌に、奥好義氏の作曲なる、すりものを、栃木縣下のあらゆる學校へ、頒つべしといふ。その歌

日光山に故北白川宮能久親王殿下の御靈をまつりたてまつる歌

華族女學校學監從五位　下田歌子　作歌
宮内省樂師　正八位　奥好義　作曲

竹の園生の　千代の蔭　島やま風に　かれたれど
高き御稜威は　玉くしげ　ふたらの峯に　聳えけり

●奇特なる嫗　うつせみの世をはなれたる、草ふかきみ山の里には、奇特なるれてなひなるものもありけり。纐纈きよといへるは、美濃國加茂郡飯地村平民又吉といへる者の母にて、年齢五十五になれる嫗なるが、數年前より　天皇陛下の御眞影をわが家の床の間に安置し、朝夕酒飯を供へ奉りて、禮拜すること、一日も怠ることなく人其ゆゑを問へど、現世にあらん限りは、一日も天子様の御陰を蒙らざる事なし、されど其御恩に酬いむため、我身の健康なる間は、一日もかゝさず、天子様へ御供へ物をなし、朝夕二度つゝ拜禮ます、といひ居るとぞ、遠近に傳へてきくもの、感ぜさるはなしとぞ、其子又吉も亦親に仕へて、まめ〳〵しく、朝暮孝行を盡し居るといふは、親子打ろひし事、奇特のものといふべし。（萩園主人寄）

●臺灣征討軍人慰勞婦人會　この會にては、こたび臺灣征討の軍人の慰勞として、北白川の宮妃殿下の御詠歌一葉、及御書翰一通に、酒肴料をそへて、寄贈すといふ。美擧と稱へつべし。さてその御詠歌は、

國のためたてしいさをはもりそにの
やまよりたかくれもはゆるかな
富子

●國風會　先年中内田遊歌子氏等、同志の人どもと、相謀りて、東京淺草森下町に設けたる、國風會は東宮千別、東宮鐵眞呂氏等、贊助員となり、和歌和文を研究する目的にて、兼て初學のひと〴〵の歌文の添削をも爲し來りしが、近來地方の會員大に增加したれどこたびは、部分をわけて、府下の分は、遊歌子氏、專ら之に當り、地方の分は、鐵眞呂氏專

ら之を擔任する事になり、會場も淺草小島町五十七番地にうつし、ます／＼地方の篤志者にして、師に乏しき、ひとの便を計るなりといふ。

●初霜　北海道には、はやく初霜れけり。十勝の國、帯廣には、九月の二十四日にて、平年に比ぶれた、三日たろく、去年にくらべては、十日たそし。また石狩の國、上川には、十月の五日にありて、平年よりは一日はやく、去年よりは、五日はやし。この日函館にもれけり。こゝは平年及昨年に比ぶれど、七日はやしといへり。さて又本島にしては、去し十二日に下野の國宇都宮のあたりにれけり。こゝは、平年よりは十七日、昨年よりは、二十五日はやしときく。

●降雹　去月の二十日、青森縣上北郡にはげしき降雹あり。この日、風いとはげしく、雷さへなりわたりて、雹のふりつもること四五寸に至り、夕ぐれよりあくるあしたになりて、やう／＼とけうせたり、さて作物などいたくそこなはれて、ろむなどは、たちたるまゝに、うたれたれど、收穫はればつかなしときく。

●赤痢病　ことし、赤痢病の流行りはじめてより、去月三十日になるまで、國中にて、この病にかゝれるもの、六萬千百九十六人にして、この内身うせたるものは、一萬三千五百三十八人なりといふ。いとれそろしく、いまはしきことなり。よく／＼いましひべきことにこそ。

●見にくさ　このほどのことなり。汽車にのりて都へかへらんとす。のりあへるものゝ數多あるがなかに、耶蘇の宣教師めきたる二十七八歳にもあらんとればしき西洋婦人あり。その向に、わが國の中等の

人ども見つべき、婦人のあり。この婦かたへの人の煙草とり出で丶、すゝむるを受けて、しきりに煙をふくを、かの西洋婦人見て側にのれる友の日本人に向ひて、It is not Praice.（あれは見つともよくありませんね）といひて、さゝやく。げにさもありけりと、思ふほどに、このたびはかの西洋婦人、携へもちたる、カバンの内より、パンをとりいで丶、舌うちならしつゝ、はづかしげもせず食ふ。人々見て、さも小兒の如きいぢきたなさよ。品のわろさよ。とて、かほをそむく。さてこの二つ何れを何れともわかちがたし。見にくさの好一對とやいはまし。西洋人の目より見なば、婦人の煙草をくゆらすこと、あやしと見ゆべし。わが國の人の目より、おとなの途にて間食をするを見れば、また賤しく見ゆるなり。煙草（タバコ）は原語（TOBACCO）にて、もとアメリカ土人の嗜みしもの丶、傳はり〳〵て、我が國にもうつり來れるなり。人の頭の蠅は二の町として、婦人の煙草をくゆらすこと、よきならはしとも見えず。むかしは男も女も煙草を吸ふことを、禁ぜられしこともあり、且貴人の前にては、失禮なりとして、せざりしなり。今も心ある人はすめり。婦人の煙草をたしむものは、すこし心して可なり。

●伊吹島結婚奇風　香川縣豐田郡につける、伊吹島といへるは、海中の一孤島なり。されどその風俗習慣など、世にことなれるがすくなからず。かくて、結婚の風習はその内にも、奇にして、初婚のものは、島外に嫁することをゆるさず。まづ婚を結ばんとするに、こなたの兩親と、かなたの兩親と、互に契約をしたる上にて、村内に若衆會といふものあり。この會にそのよしを告ぐれば、若衆どもあつまりて、

會議をなし、いさゝかも異議なければ、乃嫁の家にさはりなきよしをいひやるなり。嫁の家にて、これを聞けば、わが娘を連れて、酒を携へて、若衆會に至る。この會にてみな〳〵酒をのみたる上にて、「汝は誰某の嫁になるべし」と命じて、そのをとこの家につれゆきて「それよめを連れて來た」と云ひすてゝ歸へるなり。かくて後兒一人をまうくれば、はじめて、戸籍と嫁入の調度とをおくりて、結婚の式を行ふなりといふ。かはりたる風もあれどあるものなり。

●末松文學博士の講話（高等女子師範學校にて、ものせられしなり）

婦人の務（つゞき）

隨分高尚の地位を與へられて居つたものである、勿論或事柄に付ては、是は宗旨の方の關係から致してハ婦人は大分賤められたと言へど賤められて居つた樣なる事柄もあつた、即ち高野山に女人禁制とか云ふ樣なる種類の事が多少ありましたのである。是等は全く宗旨の方の關係から來たものとは思はれますが、一般には宗旨の勢力の及ぶ所は極く少かつたのであつて、一般に申す時には、日本の婦人は、東洋諸國の多數の女子の情況とは大に違つて居つたに相違ないのである、忠臣藏の芝居を、チッケンスと云ふ人が飜譯して、英吉利で出版致して居る。夫れを讀んで評論を下した中にも書いてありますが、此脚本を見ると、日本婦人は後ろに押込め置くとか、束縛して置くとか云ふ情況は少しも見ゑない是等を以て見れば、日本婦人の全躰の位地といふものは推して知られると書いたものもござります、夫れで右樣の所から申しました時には、日本

の婦人の位地と云ふものは、元來と雖もそんなに憐むべき位地に陷つたことは無いのである、男子も相當に敬禮を加へ、社會も夫れ相應に尊敬致した者と見て宜からうと思ひます。去ながら、又或點から申しますれば、隨分割合の惡い樣なる事柄も大分無きにしもあらない譯でありますけれ共槪して言へば、決して東洋の他の國杯と同一視すべき所で無いと思ふ、明治維新後に至りましては、此傾きも猶更追〳〵と變更致して來て、近來では既に女子の教育に餘程眼を注ぐ事になつて來た有樣である、併し女子教育を盛んにするに付ては、又今日之に付ては隨分困難な事も多いのである外國に於ても、學者達も餘程是には苦心を致されて居る樣子で、我日本でも同じく是等の苦心はあることゝ存ずるのでござります。

●附錄　本號には、女鑑目錄（第一號より第百號までの分）四葉を添へたり。なほつぎ〳〵にそへてんとす。

兼題

- 十一月
  - 五日
    - 歌……紅葉淺深
    - 文……徴兵に出てたつ人をおくる詞
  - 廿日
    - 歌……燈火
    - 文……枯野
- 十二月
  - 五日
    - 歌……冬月
    - 文……寒夜讀書
  - 廿日
    - 歌……都歳暮
    - 文……雪だるま



教の庭

十月二十日兼題　閑庭菊

天　香川縣那珂郡七ケ村　稲田松枝子

世の塵のかゝらぬ庭のいろみゐて
きよくもさけるしらきくの花

地　筑前國嘉穂郡飯塚　廣川とめ子

のがれすむあさぢが宿の菊の花
にほひはかりはかくれざり鳧

人　肥後國熊本市東寺原町　川代艶子

世の塵をさけし宿とも志らずして
にほもせにこそ菊は咲きけれ

秀逸　（十五首）

よにうとき伏やの庭のきくのはな
さきいでてこそ人に志らるれ　佐々有隣子

門とぢてうき世をよそに志ら菊の
花のあるじぞゆかしかりける　永井さい子

千代ふへん友と見るかな世の中を
はなれし庭のしらきくのはな　仁井田とみ子

秋ふけてしづけさまさる庭の面に
やさしく咲けるしらきくの花　三谷きみ子

しづかなる草のいほりの菊のはな
千代をひとりにしめて見る哉　碓井信子

とはれぬを心とすめるわかやどの
庭のしらきくにほひろめけり　小町谷りゑ子

世の塵をはらひきよめし庭なから
たけるはきくの花のしらつゆ　小町谷園子

よそにのみみやこの人のみし宿も
菊にとはるゝときはきにけり　池谷富子

志つかなる庭にゝほひてさく菊の　樋口のぶ子

よの塵しまぬいろのゆかしさ

人とはぬやとにも菊のさきしより　眞鍋　直子
よにたのもしき友をえてけり

此をのみ友と植ゑけるかひありて　田津木久子
塵にそまらぬきく咲きにけり

詫しさのなくさめにとや匂ふらん　梅本　文子
ひとめかれにし庭のしらきく

なか〳〵に心きよくも見ゆるかな　河野　文子
ちりの世いとふ庭のしらきく

とふ人も絶てなけれはなか〳〵に　小森さた子
庭のきくこそちよのともなれ

人もこすあらしも問はぬ隱れかに　久松せい子
よをしらきくの花そにほへる

（以下原稿到着順）

世はなれてすむとしもなし菊の花　磯部都屋子
かをなつかしみ人のとひきて

のかれすむぬしは誰ともしら菊の　住山　幾子
匂ひしるべにたちよりてみん

人とはぬ我かかくれかの庭なれと　田代　綾子
時をねかはにきくぞ咲きける

香をとめて人もとふへく匂ふなり　名取正代子
のかれすむともしらきくの花

をる人もなきかくれ家の庭の面は　石川るゐ子
おのかまに〳〵菊もにほへり

世をしのふくさの庵はきくのはな　石川さむ子
色かもふかく咲きにほふなり

世離れてしつけきにはにさく菊は　非山すゞの子
人にしられぬ香ににほふらん

咲きしよりうつろふまても唯一人　山本　常子
なかめくらさむ庭のしらきく

獨見てひとりやめてんかくれかに　甲斐莊ゆふ子
かをり高くも咲けるしらきく

とふ人もまれなる庭のしはかきに　降山　槇子
にほふもゆかししらきくの花

なか〳〵に靜けきやとの白きくは　牧野　貞子
心のまゝに千代もへなまし

世離れてとふ人もなきあれかきに　北島　功子
みさをもきよきしらきくの花

住み詫ひし草のいほりの庭にさへ　北島　松子

きくは八千代にゝほひける哉

しつかなるにはの籬のしらきくは　小野田のふ子
霜のはなさくこゝちこそすれ

おのつからしつけき庭はきくの花　山本のふ子
さけどうき世のとふ人もなし

しつかなる文の窓をはれしひらき　花山保江子
めてゝなかむるにはのしら菊

八千草は枯れにし庭のませのうちに　花山　操子
しもに色ますしらきくのはな

人とはぬむくらのやとの露しけみ　畠山ゆり子
さくしらきくのたのもしき哉

おとつるゝ人なき宿はしらきくの　畠山千代子
千代をひとりにしめて見るかな

門さしてなしとはいはしきくの花　畠山ゆき子
にほふかきりは人もこそとへ

老いらくのこんてふことを白菊の　長洲餘野子
心ゆたかにさけるにはのも

人とはぬさひしき宿もつく／＼と　碓井和歌子
なかむる菊によはひのぶらん

蓬生にかよひかねたるにはなから　碓井　武子
あやしきまでに匂ふしらきく

ひとけなき庭のまかきの菊のはな　武田　粲子
なれころちよの友にぞありける

うき世をは知らす顔なる庭の面に　影山やま子
人まちかほに咲けるしらきく

とふ人もなきわか宿のきくのはな　日高かず子
秋のあはれやしらて咲くらん

しつかなる庭の小陰をうち見れは　星野かつ子
雪をあさむくしらきくのはな

かいまみもゆるさはしたき奥庭の　星野ひと子
垣根ににほふきくそゆかしき

朝またき霧もひぬ間のにはなから　星野康世子
淸きはきくのにほひなりけり

いろたにもあはれとは見ん山里の　瀬戸　粲子
むくらのにはのしらきくの花

世を捨てゝ心のともはにはもせに　白倉　卿子
咲きあまりたるしらきくの花

人訪はぬ賤か伏やもあき来れは　双樹家鶴子
床しくにほふにはのしらきく

さきにけりとふ人もなき庭の面に　平山　房子

ききくしらきく花のいろ／＼

香をとめて人もこそとへ隠れかの　三浦とき子
庭へいろ／＼しら／＼きくのはな

世の中のさか〳〵は知らぬわか庭も　岸　せつ子
菊のさかりはにしきなりけり

とふ人もなき庭の面にさくきくの　塚口せい子
かをりはゆかし吾みはやさん

しつかるあさちか庭に菊植ゑて　横田須磨子
ことしも千代の花とみるかな

落葉わけとひこん人をまちかほに　福原菫子
床しくにほふにはのしらきく

世のうさもいさ白菊と咲き出てゝ　田中　冬子
なくさまれぬるこもり居の宿

問ふ人もまれなる宿はしらきくの　諸井久良子
はなをともにて秋やへなまし

つれ〳〵をとふ人もなき住家にも　舘脇ます子
咲きにほふなり庭のしらきく

春はたゝうき世に遠きやとなれと　吾妻ちか子
きくにとはるゝ秋はきにけり

世はなれてとふ人もなき宿なれは　柳田さと子
くちなしいろに菊もさくかな

人しらぬむぐらの宿はあきかせに　徳永萬壽子
庭のきくのみ世にかをるなり

仙人のこゝちこそすれさととほき　河田いし子
しつけき庭のきくのさかりは

世の中のうつろふこともしら菊の　河田ふく子
さかりを庭に見るそたのしき

住むとたに人に知られぬわか庭の　小西　清子
つゆのまかきにさけるしら菊

人とはぬ露のまかきのしらきくは　小西　琴子
はなさきぬとも誰かとふへき

秋されはこけのかよひ路つゆ深く　小西　銀子
まかきの菊も咲きそめにけり

よをさけて老をやしなふ庭のたもに　土岐　米子
わきてめてたくかをる白きく

とふものは時雨と風のほかになし　廣瀬きく子
にはの白きくさかりなれとも

我が宿はすくる月日もしらねとも　一番瀬つぎ子
ときをわすれぬきくのひと本

とふ人もなきわか庭にさきいてゝ　前澤　幸子

にはふもうれししらきくの花

荒垣のねにさきそめししらきくの　西田壽三子
清きいろかをこゝろにもかな

秋を經てわれのみまさる庭のたもに　八太　光子
ちよを契れるきくもありけり

人とはぬ庭にしあれとさきそめて　靑木　雅子
よのうきふしもしら菊のはな

友もなき身は世のうきをしら菊の　野口志奈子
咲きて匂はむ日をのみそ待つ

つれ〳〵となかむる時は心地よし　田中　靜子
色も香もある庭のしらきく

世をすてゝすみにし庭に匂ふなり　吉田　雪子
人目はゞかるしらきくのはな

のこりなく咲き匂ふかなきくの花　保井ゆさ子
にはの通ひ路見えわかぬまて

しつけさを心にしめてすむ身にも　武藤いね子
あはれを見せて咲けるしら菊

世の塵のかゝらぬ庭にさきいでゝ　今藤なか子
たかくもにほふしらぎくの花

今更にむかしのとものまたれけり　守山比古子

むくらのにはのしら菊のはな

露しけくなりゆく宿のにはのきく　須磨いの子
さかりいかにととふ人もかな

にはもせに菊はさけともなく虫の　山根　久子
こゑよりはかにとふ人もなし

人とはぬ垣根にさけるきくのはな　大谷津こと子
露おきそひていとゞかくはし

我が宿の園生に植ゑししらきくは　植木とよ子
しづけき色に咲きにけるかな

我か宿に咲きたる菊の花見れは　石川すけ子
こゝろも清くれもはるゝかな

世のちりもかゝらぬ庭の柴の戸に　萩原　章子
色香めでたくさけるしらきく

うきよをははなれし庵にさく菊の　服部かつみ子
はなこそ淸きすかたなりけれ

世離れし庭のまかきにさきそめて　北川はな子
老てふことをしらぎくのはな

訪ふ人もなきかくれかに匂ふかな　高田　淸子
我をともとやしらきくのはな

よをよそに住みなす庭の白きくは　山崎しづ子

花にかゝれるちりひぢもなし

よをへだつあさぢかやどの柴垣に
八千代をこめて匂ふしらきく　松岡葉間子

我かやどのきくのはつ花色もよし
ちらさて匂へにはのわきかせ　谷川清子

仙人も來てやめつらむかくれかの
よもきにましるしらきくの花　杉山かね子

とふ人のなきもかこたしわか庭に
ちよをしめたるしらきくの花　下元もと子

のかれすむいほりの庭もくれ竹に
千代をきそひてにほふ花かな　矢野高子

うき世をは遠く隔てゝけたかくも
まかきにゝほふしらきくの花　重松たか子

人とはぬいほりの庭はしらきくも
こゝろのまゝに咲き匂ふなり　野中わさ子

咲くとたにしられぬ庭の菊なれは
千代のよはひも我ひとり見む　越井道子

世を忍ふわか家の庭もへたてなく
露わきそひてきくさきにけり　口高こま子

わさしふの露ふきみたる朝かせに
にほひそめたり庭のしらきく　櫻井りん子

朝霧ににほひもしめる我かにはの
菊はさかりもひさしかりけり　有坂清子

我か庭の垣の八重菊さきにけり
すゑくむ袖も香ににほふらん　有坂いそ子

色も香も世に比へみんものそなき
はなゝき比のにはのしらきく　有坂秀子

つゆしげきあさちか庭のきくの花
ちよのあはれをこめて咲き匂　加賀山やす子

我か宿の庭のしらきくはなゝくは
われのゝ原とみてや過ぎまし　佐藤かめを子

柴の戸のわけくれ見ましわが窓に
千世をちきりてさける白きく　太田たけ子

露わけてとふ人もなき我かいほの
庭しろたへに咲けるしらきく　太田とき子

たゝ一人見るにはをしく匂ふかな
われにし庭のきくのひともと　林久子

人とはぬ淋しきやとの手すさひに
折りかさしてん庭のしらきく　奈良きし子

世をいとふわが隠れかの垣根にも　栗田口のぶ子

さきてぞ匂ふしらきくのはな

おのつから千代の姿は見えにけり　及川千ひろ子
荒れたる庭のしらきくのはな

草のみか人めもかるゝわかいほに　青羽茂枝子
匂ふきくこそゆかしかりけれ

よの中の塵のほかなるわかいほは　青羽逸子
盛りもひさししらきくのはな

やれ垣に三つ四ついつか白きくの　奥田環子
咲きてさひしき秋を告けゝる

住む人の心も色に見えにけり　端山さい子
山したいほのにはのしらきく

うれしくも庭のしら菊咲きそめて　鹽路花枝子
うきよのほかの友もありけり

とふ人もたへておとなき庭のおもの　村松みち子
落はかなかにかをるしらきく

ひとりすむむくらの宿の淋しさを　野崎章子
なくさめかほににほふ菊かな

十月廿日兼題　時雨

天　山梨縣甲府市山田町　名取正代

はれみくもりみ定めなき此頃のそらのけしき、秋のあはれにも立ちまさりてものすさまじうなん、野邊にさきにほふ千草は、大かた色あせはてて、なく虫の聲さへかれ〴〵にて、いとゞかなしきに、木枯の吹きそひて、紅葉まじりにふりくる、時雨の雨のいぶせさ、げにいふばかりなし。さりとも都のうちにすまひなむ、かゝるをりの心やりもあまたあめれど、さらでだに訪ふ人まれの山里にては、まなくふりしきる時雨の爲にや、はたちりしく落葉に道のうづもれたる爲にや、いと〳〵へだてがちにて、たえて音なふもののあらねば、秋よりもげにさびしさのまさりてなん。

地　播磨龍野　田津木久子

此頃のならひとて、まなく時雨るゝ雲のけはひは、かの露けがりし秋よりも、いみじうまさりて、寂しさいはん方なきに、まして夜に入りてよりは、いとはげしう、木枯のかぜの吹きすさむに、寒さも身に

しみ渡りて、まどろまれず、さびしさのみまさりゆく折しも、はら〳〵と音たかう、また〳〵時雨ぞ降りいでぬる。

さらぬだに寐られぬ夜はの寂しさを
いかにたねよとふる時雨かな

人

播磨龍野　眞鍋直子

千草の花の、みるかげもなうかれふしたる中に、菊の二もと三本咲き殘りたるか、さびしげに匂へる前栽をみるにつけても、何となう物心ぼそうなり行く夕まぐれ、木の葉をさそふ風の、吹きすさふと思ふまもなく、はら〳〵と時雨さへ降りいでたるに誘はれて、木々の梢の、いともろう敷みたる〻、いみじうあはれさもいやまさりて。

さらぬだにもろき木の葉を心なく
さそひ盡して降るしぐれ哉

―――――（以下原稿到着順）

佐々有鄰子

わがをかの落葉まじりのむら時雨里の木末を今やそむらんと、千蔭翁が歌のごとく、山の紅葉は風のものとなりて、猿の木實もとむるこゑ耳うるさくきこゆるのみなり、ふもと田とほく、黄雲の棚引くは、豊かに實のる稲葉のいろにて、雨雲はいつのまにかれゆきけん、朝にいでし山家をさしてかへりくる鳥どともに、軒のすだれうごかし、夕ぐれかけてふりそ〻ぐ音はむねにとほりてさびしくなん。

長洲餘野子

心地す〻まぬあまり、秋のゆくへもしらずたれこめてのみありつるに、ふとおどろかし給ふ友あり、いとうれしく、かけゆきて、たれならんと見るに、これ我むつましうする友なり、いよ〻うれしく、今日はわれも心地あしけれど、いづくにても名どころを尋ねんといはる〻に、日ごろより我好める道なれども て、ひかる〻ま〻にともなはれつ、やがていまだあしもいといたうればゆるをり、この君ある門のあたりにいり給ふ、いとあやしく、こ〻はいづこととふに、れいの、かの泉岳寺にこそといふにいとうれしく、日頃よりものせむこ〻ろなりしが、いまだ其本意をねざりしなれど、いよ〻うれしく、これかの大石のはかよ、あなかしこ、君かためかたなき人にもたいめをう、かくよろこびしきことはなし、右にをれ、

左にをれて、四十七士のぞうども見、やがて首あらひ非など見るに、すゝろに古の事のたもひいでられ、あゝとさけびて空をあふげど、雨しは〳〵とふりきぬ、そもこの雨、忠臣義士のこゝろをはめてしぐるゝか、我らがこゝろをはかる、もらひ涙か、

碓井武子

雨としいへど、なべてさう〳〵しきものなるに、殊に秋のすゑ冬のはじめにかけて、降りみふらすみ定めなく、物しのびやかにふりしきるしぐれの雨に、もみぢども散りそめて、あたりさびしうなりまさるこゝろは、いよ〳〵心ぼそさいはんかたなく、いとわびしきものにこそありけれ、

岸せつ子

宵の程のきら〳〵しき空に似もやらで、五更すぐる頃より、山風あら〳〵しく吹きすさびて、散りまよふ木葉にやあらん、落ち亂るゝさゝ栗にやあらん、板戸打つ音、さながらつぶての如くに、やがて雨さへ交りて、荒涼しき事いはん方なし、さらぬだにまだらなる庭の梢、露霜の置くたにをしき白菊の、いかに淋しう如何にあさましうなりなんと、静心なきまゝ、板戸細目に開けて、したし打見やるに、いみじう暗くて、あやめもわかぬに、あやしや松の片枝のみ、かすかに見ゆるにぞ、稲電にやと仰けば、あな嬉し月影の斷れにし雲間をもるゝなりけり、さしも烈しかりし小夜しぐれも、程なくをさまりて、月影はさやかに、星影は數多にきらめきわたりぬ、見渡せば名殘の草々、おもれ伏したるが中に、白菊のいときかはりたらんことく、露を帶びたるさまのいとあはれなる、松楓のぬれ色のかゝやきたる、埋高くちりしける落葉の、葉毎〳〵に光をふくみたるさま、なか〳〵にをかしうこそ、

鈴木昌子

花にうかれし春の日も、すゞみがてらに盛かりし夏の夕も、隙ゆく駒の足はやみ、何時しか秋の最中も過ぎてけり。空いと晴やかなるも、日頃の暑さは消え失せて、袖ふく風もいと寒し、文机に向ひ、物しらべなどなす、折りしも、月うらゝかに上り、いとさえ渡り、燈火を用ふる煩だになし、あまりのよさに文打ちすて、眺むる時しも、何處ともなく、黒きむら雲飛ひ來りて、月の光をかくしぬ、あはやと思

ふ折りしも、小雨降りいで、はら〳〵と庭の木葉を打つ音も、また興あり、變りやすきは秋の空と云ひけんも、げに理りなり、暫時にして晴れ、雨降り後の月の景色も一入にて、木葉より滴る雨の、月の光に映じてきらめくもまたをかし、時雨とは、いつとしもなく、時折り〳〵に降りくるを以て、しか云ふにやあらん、

今藤仲子

冬立つけはひ物さびしう、人めも草も枯れはて〳〵今日此頃、物思ふ身の心やりにもと、文机によりて、物の本見んとせしに、はら〳〵と音たつるに、窓のとをひらき眺むれど、今までうら〳〵かなりし空、打ちしぐれつゝ、けふ立冬のことわりがほに降り出で〳〵風さへいとあらあらしう、木の葉をさそひて、あたりかきくらすやうなるに、わが心のくもりもいやまして、さらぬだに露けき袖をぬらしそふるなん、いともわびしきや、

守山比古子

すぎわたる風のはださむきに、ふとめをさまして、まくらもだくるほど、ちりゆく木の葉の、はら〳〵とまたゝくにたへかねて、戸おしあけたれど、やう〳〵しらみゆくそら、風いと吹きすさび、時雨ふりしきりて、ものすごうなりぬ、あはれゆく秋のかたみにもとたのめてし紅葉も、はかなくなりぬるこそ、いと〳〵口をしけれ、

山崎しつ子

雨をいとふは世のならひなれど、夕暮などいたうかすみ渡りてふりそゝける春雨は、やかて花のひもとくよすがともなりてをかしくや夏の日の暑さたへがたき折しも降り出てたる夕立は、こよなううれし、秋の村雨は木々の梢を染め渡して、たつたひめを助くるにやと思へど、誰れかはゆかしと思はざらむ、されどふりみふらずみ空さだめなくしぐるゝ冬ころ、物あはれなる限りにはあんなれ、おとなふ人もなき夕ぐれ、文など見つゝ、こし方行く末のことのみおもひ出でられて、はて〳〵は袖にもふりかゝりてなん、

谷川清子

こゝろなき我が身にだに、もの悲しかりける秋も、暮はつる事の、今更名殘を忘まれて、せめてはのこ

る紅葉をだにたづね見むやと、日頃むつめる友垣と、あたりちかき山里の、谷の小川によりそひて分けいるに、此程の木枯に、たへがたきまでに吹きあらされて、覺束なく、梢に殘る紅葉も、さと吹く風にさそはれて、こゝかしこ清く流るゝ谷水に散り浮びて、岩間に淀めるもいとさう〳〵しく、かくてやゝ深く分けいりければ、かなたの常盤木にまじりて、四方の梢に散りのこりたる紅葉のうつくしさ、えもいはれず、しむし岩根に腰打ちかけて、うちまもりつゝをるに、早や日も暮にけり、夕月の千草におきわたせる露にきらめきて、あかぬながめをましけるに、空俄にかきくもり、山のはあらぬ月もかくれ、いと暗うなりぬと思ふまに、はやしぐれのあらし〳〵しきかぜにつれてきぬれど立寄らんかげしだになければ、衣の袖もしとゞにぬれぬ、山めぐりするむらしぐれ空吹くかせにはれゆきて、松の梢にさす月の、影こそことにあはれなれ、

佐藤かめを子

正木のかつら色つきて、秋も益々深くなりぬ、晴れみ陰りみ定めなき、此頃の空、なにとなくうらわびしく、今日も朝よりぬれてかわきて、しぐれの雨の降りそゝぎ、紅葉ちる音さへ、わりなうたてくぞありける、日頃うるはしき友どちも、同じ心に物うきにやあらん、ふつに問ひだにこず、文の林も、今はやう〳〵悩みて、一人机によりかゝり、つく〳〵とこしかた行く末のことなど、思ひやりつゝ居るほどに、茜さす日はありながら、又もや降りしく村時雨に、梢の木の葉はら〳〵と、學の窓にちりみだれ、松風にそふ筧の音もほそく、はかなく身にしみわたり、いとゞわびしさに、窓押しひらき眺むれど、庭もせに紅葉ちりしきて、入日のかげのうつりたるは、赤き心の色にも出てて、いとゞめでたし、末撓むまで咲きみちたる小萩の花の、ゆかり色も、今はやう〳〵くつろひて、みるさまもなし、半やれくづれたるまがきの外に、頭白くひろごりたる尾花の袖の、時雨のために打ちぬれたるも、いと哀れなり、みわたすかぎり野も山も妻とふ鹿のこゑたえて、梢さみしきまで、木の葉ちり落ちぬ、げに口惜くかなしきものは、くれ行く秋のしぐれになん、

廣田とめ子

らめなど、思ふ折しも、友のきたりぬれど、近き山べに、秋の名殘の茸狩すとて出で行きけり、やがて野路にかゝりけれど、刈田のくろに、櫨紅葉のちりしきて殘されたる、案山子の獨り立てるなど、いとあはれに打見つゝ、とある山にわけいり、こゝらあさりける程に、此頃の空のけしきの定めなく、いみじく曇りて、さと吹きくる風に、木の葉のはら〳〵とちりしきて、やがて時雨も降り出て、いと物すごくればゆるに、たよるべき方もなく、松の木かげにしばし笠やどりしてありけるに、程もなく晴れぬれど神無月のみじかき日は、はや西の山に落ち、夕月の影、かすかに雲間より見え初めて、いとも家路に急がれつゝ、

晴れくもる時雨の空のたえ間にと
　　月の影さへいそぐやまぶみ

林　ひさ子

朝夕めでし庭の千草の花の盛りも色あせて、見るかひもなくなりゆき、遠近の山の紅葉も、はやそみはてぬれば、あらしの風のさそひつくさぬ間に、今日は見にゆかんと、日頃したしうする人とかたらひて、かよひもなれぬさかしき山のおくにわけいれば、こゝには、としふりし紅葉の色ふかくそみたるがあまたありて、めでたさいはんかたなければ、そのかげに柴をりしきつゝ、れきなたちは、ひさごのさけくみかはしなどして、かはの色さへ紅葉にまかひて、いとをかし、けふの家つとには、この紅葉の一枝をとはれもへど、あまたのとしをへて、かくさかえたるものをたをらんは、心なき業ならんと、たゞうちまもりてありけるうちに、空のけはひ俄にかはりゆき、かぜとゝもに、あわたゞしうしくれきぬれど、はら〳〵と紅葉の散りくる樣、得もいはれすをかしかりけれど、なほ立ち去りかねてありけるに、雨はいよゝふりしきりけれど、せんかたなく、もとこし山路をくだりきて、山かげのしつかふせやに、しはしはれ間を待つ程もなく、雨やみぬれは、またしくれこぬさきといそくほどもなく、又一しきりふり出てぬれど、やどるべき家さへなければぬれつゝ、

うき秋にわかるゝ今日の袖なれど
　　かわく間もなくぬれまさるらん

村松みち子

山深く住居ぬるみは、いとたのしく、をり〳〵の月花のながめは、たのづからにて、鶯よ、ほとゝぎすよと、みやこ人のつとひ來て、柴の戸をさすひまだになく、いとにぎはしかりつるも、今は時雨のしみ〴〵とふりはへ、來まさん人もなくて、いとうちしめりたるわがやどの、まして今宵は小やみなくいとゞ降りまさるに、軒近くましらのなく聲もいとあはれなり。夜半のあらしまどをうちて夢も結ばすなん

及川千ひろ子

雨は、春雨の、いとしめやかに、もゆる柳に打ち煙れる、いふべきにもあらず、夕立の、見るまゝに盆を傾くる、跡さりげなく晴れ行きて、今までたへがたう苦しき暑さの、いつちいにけん、よみがへりたる心地せらるゝも、又あはれなり。梅雨はた、日數へて、をやみなく、つれ〴〵とふりくらしたる折、まわへる友の、訪ひ來て、しめやかに物語したるこそ、心ゆくわざなれ。されど、とりわきて、をかしきは、時雨になんありける。あるは木々の木末ににしき織りなして、春の花の色香を奪ひ、あるは月すみ渡る大空の、いづこよりにかあらん、はら〳〵と音立てゝ、桂の雫かと思ひまどはし、あるはうらゝかなる日影、忽にかきくもり、さと吹きくる木枯にさはひて、定めなき世のさま、うつろひ易き人の心のたとへにひかれ、あるは物思ふ人の袖にかゝりて、あはれなる文つけなどにせらるゝよ。まいて文讀む夜の窓を打ちて、まどろむ夢を驚かしつゝ、いさめ顔なるこそ、いとをかしけれ。

先つ頃の讃岐の國なる高松にまかりしよりかねて聞きし古戰場なる屋嶋に物して

牧野貞子

矢さけびのむかし覺えて屋嶋かた
よせくる浪にそてぬらしけり

旅泊　仝人

故さとの夢はくたけてかちまくら
はかなくかよふなみの音かな

深山瀧　河野文子

山ふかみ落ちくる音のなかりせは
たれかしらましたきのしら糸

於藤　　仝　人

信濃なる山路のゆきときゝぬれと
　高さその名はなほのこりけり

不知火を見にゆきてよめる歌　　徳永萬壽子

星影のあまたうかぶとみねつるは
　名にたふうみの沖のしらぬ火　　徳永壽美子

あかつきのをちこちの空不知火の
　ひかりいやます大わたのはら　　澤田春子

みな人はこよひ待ねてうなはらに
　ひかりもみつるしらぬ火の影　　佐藤俊子

あけがたの大うな原をみわたせと
　波にてりそふしらぬ火のかけ　　佐々小琴子

ひとつみねふたつあらはれ百千萬
　かずかぎりなき沖のしらぬ火　　三好榮子

不知火のひかりかはらずみね渡る
　波しづかなる御代にもある哉　　平澤ふさ子

武夫

君か代は千代に八千代に安かれと
　いのちをしまず守れもの丶ふ

源太景季　　畠山千代子

世にしらぬひとこそなけれ武士の
　箙にかざすはなのうめが枝

妹の死を悲しみて　　鎌田菊野女

朝な夕なれはしてこてたるわか宿の
　庭のなでしこかれしかなしさ

紫式部　　有坂清子

身にあまるなさけの露の深さにも
　こゝろなびかぬ女郎花かな

初秋風　　川田さの子

今さみれは庭のたま笹うちなびき
　つゆちるかぜに秋はきにけり

故郷月　　仝　人

てる月の影はむかしのかげながら
　かはりはてたるふるさとの空

豊後國久住山の奥なる草廬にて

長田年子

夏きてもたかきみ山にすみぬれど
　あふきの風のこひしくもなし
もゝしきの都のひとにみせはやな
　あさぢが原のひめゆりのはな

三陸海嘯の慘況をきゝて小學生徒等とゝもにいさゝかの金圓をおくるとて

佐々小琴子

ひとひらの品かろけれど百ちぢに
　こゝろをこめしいろとしれ人

都の月

水津すけ子

ゆきかよふ市のくるまの音たえて
　うれしの森にかゝるつきかけ

清國威海衛占領軍の人々か熊本營に凱旋せし祝宴に侍りて

軍人家族　徳永萬壽子

明治の二十七八年のころ、わが皇國と清國といさかひおこりぬれど、皇軍人かの國におしわたり、陸にも海にもたぐひまれなる戰に、わが軍人等は國のため、しきしまの大和心をふりたてて、命をかぎりたがひに心きそひあひ、たてしいさをのあらはれて、もろこし人のいぎたなき心のたてはたまりえず、風の木の葉とちりぢりになりゆくあとの威海衛を占領しつる軍人たちが、　天皇のみいつを四方にかがやかし、いさましくかへり來ましゝを、今茲に二十九年の六月二十九日、熊本營の凱旋祝宴に侍りて、一言かくなん。

もろこしの草木を靡けたけき名を
　四方にのこして歸るますらを
萬代もその名はくちじますらをの
　たぐひまれにもたてし勳功は

佐々豐水曰徳永萬壽子の兄弟二人は今度威海衛より凱旋して兩人ともに勳八等に瑞寶章を賜り名譽のことにぞありける

女鑑目錄

自第壹號
至第百號

女鑑目録 自第壹號 至第百號

●女鑑

●論説

富士谷御杖大人著

土佐日記燈

菊判

大和綴

美本

近刊

富士谷御杖の翁の、斯の道の學に至り深かりしは、今更にいはず、そのものせられし著書おほかるが中に、燈といふもの、古事記燈、萬葉集燈は、翁か在世のころに、ゑり梓となりて世に廣でりしも、この土佐日記燈は、はやく文化の末つかたに成れるものなるが、さる由ありて時の栗田の宮の請はせらるゝに、稿本のまゝに奉られりしを、後いくばくもなくて、翁ははかなくみまかられにしかば、さながらに埋もりて、流布せずなりにき、世の學者、みまほしうすれども、さるよしもなくて、空しく年經ぬること、こゝに數十年、さるを翁の男元廣ぬしが、さるべき筋より辛うじて、寫し傳へたるを、いとうれしくて、このたび我が社にて、摺り卷にものして、廣く世に流布せしめてんとす、そもそもこの燈は、世にありふれたる注釋書の類とはことにして、貫之朝臣のこの日記を書かれしは、かりそめのすさびにあらず、土佐の守に任されしをふかく憤る由ありて、あらはには女のものせしさまになして、深き心はその言葉のうちにふくめたり、といふをもとゝして言詞は、更なり、文意をもいと委しくときなしながら、いと廣く考證をも引き出でられたり、この書今より世にひろごりなば、學者を益することも尠からざるべく、はた、翁の靈も天翔り國翔りて、うれしとよろこび給はん、やよやの斯道の學に志あらんものはいちはやく繙きてよかし、

東京市京橋區築地二丁目廿一番地
（電話番號一九四六）

發行所　國光社

女鑑第百拾八號目錄

〔明治二十四年八月八日内務省許可〕
〔明治廿五年…月…日…〕

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京銀座郵便取扱所へ御振込可被下事○郵劵を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

每月五日廿日發行

定價			廣告料
一冊	六冊(三ヶ月分)	十二冊(半年分)	五號活字廿三字詰一行金二十錢
十錢	五十五錢	壹圓	
全國無遞送料			

明治二十九年十月十九日印刷
同　年十月二十日發行

發行兼印刷人　東京京橋區築地二丁目二十一番地　川崎直衛
編輯人　同　山根勇藏
發行所　同　(電話番號一九四六)　國光社

〔印刷所　東京明…社印刷部〕